
ラブレター

壬生一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブレター

【Nコード】

N4412K

【作者名】

壬生一葉

【あらすじ】

「帰国したら結婚をしよう」と恋人の康祐に言われた香澄。会社を辞め、独りの時間を目の当たりにする。 人との繋がりを求めて飛び込んだチャットルーム。そこで出会ったヒロトとカスミ。カスミが求めたものは。。。

<1>

実は私には婚約者が居ます。

4月からその人について渡仏します。

勝手な事を言ってるのは解ってる。

残りの2ヶ月、この端末上で、私と

恋をしてくれませんか。

ディスプレイに映し出された文章を何度も、何度も読み直してキーボード上の一番大きなキーに手を翳す。

それを押してしまえば、この文章は次の瞬間にディスプレイに浮かび上がり相手の人に晒される。

ヒロト。

2週間程前にネットのチャットルームで知り合った男性。

何かの映画の話で盛り上がってるルームだった。

皆チャットに慣れてる人達ばかりであたしの発言力は至極最少だった。

それでも『カスミは?>』と気に掛けてくれたのがヒロト。

こんな大胆な自分は色んな境遇が生み出した二次元の、もう一人のカスミ。

「香澄。とうとうやったよ俺。」

康祐クンのマンションであたしは何時もの様に夕ご飯を作っていた。

今週一週間、何度も何度も家で練習した揚げ出し豆腐と豚肉のピリ辛何とか・・・。

「どうしたの？」

「来年の4月から念願のフランス研修だよ！」

「フランス・・・。」

あたし達が勤める酒造メーカーでここ十年ワインの輸入に力を入れていて、目利きの人間を育成する為に研修制度を取り入れている。営業成績は勿論、面接を経てフランス行きの切符を手に入れる事が出来るというものだ。

康祐クンと付き合って1年が過ぎようとしていた矢先のこの話。

あたしは別れ話をされるのだらうと、彼のその先の言葉を待っていた。

「・・・香澄、喜んでくれないの？」

「え・・・うんただ吃驚して・・・良かったね康祐クン。おめでとう。」

彼が頑張っていたのはあたしだって知ってる。

ソムリエの資格だって、学校に通って取ってたもんね。

「それで香澄も俺と一緒にフランスに2年間行かないかなって・・・。」

康祐クンが少し照れた様にそう言った。

<1> (後書き)

長編始まりました。

又お付き合い頂けると大変嬉しいです。宜しくお願い致します。

*** 壬生 ***

<2>

康祐クンが口にしたその言葉を噛み締めた。

彼は「一応・・・プロポーズなんだけど」と付け足す。

何を、どんな言葉を、声に出して返していいのか直ぐには思いつけずあたしは頭の中で知りえる言葉を総動員させていた。

そんなあたしを見て康祐クンは小さく笑った。

「婚約者としてフランスに連れて行きたい。帰ってきたら皆を呼んで結婚式を挙げよう。」

それでも気後れするあたしを彼は抱きしめた。

彼が何時からかつけるようになった香水の香りが鼻腔をいっぱいにする。

「忙しくなるよ？」

正直言って嬉しさの余り言葉が出てこなかったというよりは驚きの余りと言った方が正しかった。

康祐クンは社内でもかなり優秀な営業マンで人望も有る。

加えて端正な顔立ちに、180センチを超える長身のルックス。

その女性社員憧れの彼が同期のあたしに「付き合おう」と言ってきた時も言葉を失ったものだが今日ほど、思考能力が低下した事は無かった。

謙遜ではなく、あたしは顔も普通だしスタイルだって少しぽっちゃり気味だし、特にコレと言った物は何もない。

話を面白くも出来なければ、気の利いた言葉一つ浮かび上がる事も無いボキャブラリーの少なさ。

とにかく目立つ事はずっと避けてきた。

ただ静かに平平凡凡と暮らして、そして安住の地で終わりが迎えら

れば良いなとぼんやりと考えている女。

一度だけ康祐クンに「どうしてあたしと？」と聞いたことがある。

彼は「香澄と居ると落ち着くんだ」と言ってくれた。

だからあたしはそれで納得出来た。

きつと彼は素敵過ぎるから何時も周りには華やかな女性が多くて、そこでは彼は常に気を抜けないで居たのだろうと解釈したのだ。

初めて彼のマンションに來た時に部屋の汚さに吃驚した事を思い出す。

外でしっかりしてる分、家の中まで手が回らないのだろうと来て早々、彼を外に追い出し掃除をしたんだった。

あたしが入力した文字は、大人しくカスミの次の指示を待っていた。

この文字を見てヒロトは何と思うだろう。

そのまま落ちるだろうか。笑うだろうか。フザケルナと怒るだろうか。

・・・ヒロトなら受け止めてくれる・・・
そんな期待をしている自分が居る。

それにもし一蹴されたとしても、二次元の事だ。
此処に繋がらなければ良いだけの話。無かった事にすれば良いだけの話。

なのにエンターキーを押す手が小さく震える。

ヒロトという二次元の友人さえ失ってしまう。

本当にそれで良いのだろうか。

この2週間程、稚拙なあたしの話を時間が経つのを忘れさせてくれるほど聞いてくれたヒロト。

劇団員だと云う彼が、熱く語る舞台や映画の話。

康祐クンには無い、熱さとあったかさを持った男性^{ひと}。

顔も声も知らない人と繋がったこのチャット。

顔色も声色も伝わらないこの無機質さ。

それでもヒロトと話すのは楽しかった。夜の訪れを心待ちにした毎日。

ヒロトになら、その気にさせて貰える気がしたの。
自分が”愛されている”と感じられる気がしてる。
だから、あたしのこのメッセージをヒロトに贈る事を決めた。

期間限定の恋を。

あたしに、ください。

右手の薬指でキーを軽く押した。

カチッと音がして、目の前の画面に映し出された。
すると、ヒロトがあたしの沈黙を心配してか、何行にも

ヒロト…カスミ？

とリロードされた。

あたしはメッセをアップロードした。ヒロトがどの瞬間でそれをリロードするかは解らない。

あたしが席を外したのかと思って、ヒロトもパソの前から立ち上がり、何か別の事をし始めているかもしれない。

お風呂に行ったかもしれない。

寝てしまっているかもしれない。

アップする迄に相当の時間を要したくせに、次のリロードを即実行するあたし。

次の瞬間、ディスプレイにはヒロトの文字が浮かび上がっていた。

<4>

康祐クンのプロポーズに「はい」と返事をした記憶は無いが、康祐クンは仕事を順序良く片付けるみたいにあたしの予定を立てていた。

12月いっぱいまで6年勤めた会社を辞める事。

出発迄、仏語のスクールに通う事。

あたしの親に挨拶に来るが、結納、入籍、披露宴は帰国後にしたい事。

「ちょっとはフランス語喋れるって言ってたよね？」

「・・・うん。でももう忘れてるかもしれない。ホームステイしてたのも学生の頃の話だし・・・。」

「じゃあ大丈夫だよ、スクール通ってさ、向こう行ったら俺を助けてくれると嬉しいな。」

あたしはただただ小さく頷いた。

彼の役に立てれば嬉しい。

その時あたしは、小さな小さな心の行燈に火を灯された気持ちになった。

「野々原香澄さんが今月いっぱいまで退職する事になりました。えー皆ももう知ってるかと思うが

営業部の栗原康祐君と来年の4月から渡仏する事になっているそうだ。」

上司である片岡部長が総務部数十名の前でそう切り出して、あたしにも挨拶するように促した。

沢山の視線を、自分が集めてるのかと思うだけで体中が熱くって、

頭もパニック状態で消え入りたい気持ちだった。

「……ろ6年間お世話になりました。後一カ月ですが……おね・します。」

あたしが何とか言葉を紡ぎ終わると、疎らな拍手が聞こえてきた。

康祐クンとあたしが付き合ってる事を未だに快く思っていない女性社員は多い。

緊張が解けた頃のお昼休み。

菓子パンやヨーグルトが入ったコンビニの袋を下げて会社に戻ろうとする時、数メートル先の角から同じ制服に身を纏った女性3名が財布を胸に抱いて、歩みを進めてきた。

あたしの数歩前を闊歩している。見つかるのを恐れてあたしの身体は小さく、歩幅を弱める。

それでも彼女達の辛辣な迄の話し声は否が応にも耳に入ってきた。

「栗原さん、野々原の事、本気だったんだねー。」

「ねえ結婚とは。」

「結婚、しないんじゃない？」

「えー?! 何その根拠。」

「良い? 栗原さんだよ? 使えるコネは全て使い、利益にならない人付き合ひは一切しない男なんだよ？」

野々原の使えるところって何よ、語学でしょ。フランス行きはあの女と付き合うちょっと前から

決まってたんだよ。」

「まじで言ってるの?!・・・てか庄野、それ本人に聞いた訳？」

「今でも付き合ひあんの? 栗原さんと。」

真ん中に立つのは、総務部で一番綺麗だと評判の庄野さん。大学の後輩でもあった。

「たまに電話来るからお酒飲んでホテルって感じだけどね。」

「・・・あんただけど栗原さんも相当ドライな男だね。」

3人は、まるで世界は自分達を中心とばかりに大きな声で、ヒールを打ち鳴らした。

あたしの心の灯り^{あか}は、僅かな期間だけ小さく灯り^{とも}、たった一度の突風に吹き消されてしまった。

過ごした6年間が何だったのか、あたしはこの会社の一部として働いていたのかと疑わしいほど、その一カ月あたしは、コピー取りと事務用品の整理と伝票綴じで終わってしまった。

送迎会を開こうかと口を開きかけた部長を止めたのはあたしだった。

もうこれ以上、惨めな思いをするのは御免だった。

何が惨めか。

康祐クンとあたしの事を面白可笑しく吹聴する後輩の言葉の真偽を、
康祐クンに問い質す事を出来ない自分。

心の何処かで康祐クンを疑いながらも、それを確かめる術を行使で
きない自分。

「香澄、パスポート期限、大丈夫なの？」

彼がうちに挨拶に来てからというものの母親は上機嫌だった。

「うん。」

お母さんが余りにも嬉しそうで、心のこの不安を曝け出す事は出来
なかった。

自室に閉じ籠り、彼の予定通りにあたしはネットでランゲージスク
ールを検索する。

そこで、スクールの口コミ等を見て、目星をつけた。

ネットの中のコミュニケーションツールの奥深さに感心した。

ホームページ、ブログ、ツイッター・・・お手軽で手を出しやすか
ったのが”チャット”だった。

誰かに康祐クンの事を聞いて欲しかった。

そして”何かを”言っただけだった。

『出会い系』なんて自分には関係無いと思ってた。

文字で繋がるなんて白々しいと思ったし、何よりニュースで聞くネ
ット犯罪が自分の身にも起こったかどうかと不安が擡げている。
ただどその時は、どうしても話したかった。誰かに聞いて欲しかっ
た。

いかにも、みたいなチャットルームは避けた。

それで確か”わいわい”というチャットルーム名をクリックしたの
だった。

そこではヒロトを中心に、映画の話で盛り上がっていた。

話題の3Dの映画を字幕版で見たらどうか、オスカー取った女優
の昔出てた映画の話とかで男女入り混じって会話をしていた。

あたしはこんな経験自体無くて、取り敢えず入室したから挨拶だけ
をと思った。

カスミ…こんばんわ

と入力する。

ヒロト…こんばんわ、お初だね？

ヒロトの一声・・・一言かな、この場合。一言を皮切りにずらずら
っとルーム内の人があたしに挨拶を返して来た。
妙な緊張は無い。それは視線が無いからなのか。

ヒロト…カスミは映画、何が好きなの？

カスミ…仏『彼方の恋』

入力して、ちょっと空気読めなかったかなと思った。
この映画は本当に小さな映画館でしか上映されず、そんな話題にも
ならなかった作品だった。

チロル…あーそれアタシも好きだよ、カスミ。あーゆーの隠れた名作とか言うんじゃないの？どうよ、ヒロト>

ユウ…俺、シラネーゴメン。ヨーロッパの映画って俺の肌に合わねーんだよなあ。

ヒロト…ユウ>食わず嫌いはいかんね。俺もそれ見たよ。恋愛物は得意じゃないけど面白かった。

わー・・・この作品を知ってるんだー。

やっぱり此処の人達は本当に映画とか好きな人なんだあ。

こういうチャットも有るんだなとあたしは安堵の色を見せる。

それから常連さん達の会話をあたしはずっと目で追っていた。

時折ヒロトがあたしを気遣ってくれて、簡潔に返事を入力した。

アンジー…じゃー落ち>a l l

チロル…あたしももう寝むーz z z落ち>a l l

こんな感じで数名がルームから落ちて行く。

殆どが男性になった。

オザ…今度オフ会何時やる？>a l l

ユウ…次回は絶対出る！何が何でもだ！

ヒロト…お前の目的がわからさまで俺は目も当てられないぞ、ユウ>アツシ…だよ。

・・・オフ会とかやってるんだ。あーやっぱり・・・この話の中には入れないかな。

あたしも落ちようかな・・・。

そう思いながらも、あたしはこの人達の会話が気になって最後にもう一回みたいな気持ちでリロードボタンをクリックする。

ユウ…チロル目当てで何が悪い。大体、ココにチロル引っ張ってき
たの俺だぞ?!

オザ…悪いとは言っていないけど。ヨダレ垂れ過ぎだったの、ユウ>
ヒロト…カスミ>ごめんね男所帯で。嫌だったら落ちて良いけど又、
顔出してよ。

アツシ…チロルは男、居るっぽくね?

あたし、ヒロトの一言で居ても良いのかなって思えた。

カスミ…女には聞いて欲しくない?・・・そうだったら落ちるよ>
all

あたしは覚えたてのチャット単語を駆使する。

あたしが贈ったメッセに、ヒロトは直ぐに返事をアップしてくれた。

ヒロト…恋？カスミは今マリッジブルーなの？

マリッジブルー……。その言葉さえ綺麗事に聞こえてしまう。

あたしの場合、ブルーでは無い。黒に近いグレーと言っても良い。

結婚をする事に不安を抱えていると言うよりは、この先の人生が大きな不安だった……。

フランスに行き通訳をやるのが、あたしが進むべき道なのか思い悩まない訳では無い。

カスミ…突然……。頭おかしい、かな。

ヒロト…頭がおかしいとは思わないよ。カスミが冗談でそういう事言う人じゃない事も解ってるつもりだけど。

ヒロトはやっぱり、きちんと受け止めれてくれた。

これで振られても、笑って、このチャットから退室出来そうな気がする。

ヒロト…どういう恋がしたいの？

目の前の文字を何度もなぞる。

ドウイウ恋……。その質問にあたしは少し戸惑う。

カスミ…必要とされたい。アタシを必要として欲しい。2カ月、アタシを見て欲しいの。

ヒロト…会ったりはしないの？

カスミ…会うのは怖い。ヒロトをがっかりさせたくない。

ヒロト…がっかりするかどうかは別として。この場所だけの恋をしたいって事なの？

カスミ…うん。やっぱり変だね、無理があるよね。

この2カ月で本物の恋が出来るとは思っていない。

思っていないけど、あたしの声を聞িয়েくれる誰かが欲しい。

友人じゃ駄目で、リアルじゃ駄目で、ヒロトが良いとあたしの心が囁く。

ヒロト…良いよ。ルールを決めよう。

カスミ…良いの？

ヒロト…今、彼女も居ないし、カスミが良い子なの知ってるし、俺で良いんなら良いよ。

ヒロトが良いの、と言えたら良かったのにとあたしは思う。

オザ…全然問題なし！むしろユウに女心を教えてやってよ、カスミ>
アツシ…無し！

ヒロト…気にしないで居なよ。下っちゃんかもだけど。

ユウ…俺はチロルが好きなんだよね、カスミ> アンジ―はオザの女―。

あたしはパソの前で思わず、口元を綻ばせる。

” ありがとう ”

ヒロト、オザ、アンジ―は同じ劇団に所属してる俳優さんの卵。

ユウも元々はヒロトと一緒に劇団だったのだけれど、自分で劇団を立ち上げ、そこにチロルが所属してるって事らしい。

ヒロトとユウ、今はなかなか会う機会が取れずチャットの中で繋がりを維持していると話してくれた。

カスミ…ユウ、聞いても良い？チロルの事どんな風に好きなの？…
・あたし、今まで本気で

人を好きになった事が無い、気がする。

今までリアルな友達にさえ話した事も無いような事を議題に挙げるカスミ。

聞けずに、ただ流れに身を任せて生きてきた28年間。

ユウ…どんな風？？ワカンネーけど全力？かな、取り敢えず。今は結婚とか考えられないけど。

ヒロト…（笑）全力ってのがユウらしいな。

オザ…俺は目途が立てば、アンジ―と結婚したいかな。

アツシ…オザは結婚願望強すぎね？未だ23だろ、アンジーって20じゃなかった？

・・・結婚、23歳で？

あたしはパソコンを前にして、顔の見えない若者達に感心した。

俳優になりたいと、夢があり希望があり、自分が進むべき道をきちんと探し出している。

何かに流されるのではなく、未来への道を自分で開拓し始めている。

オザ…今まで男と付き合った事ないとか？！カスミ>

ユウ…マジかよ！

カスミ…付き合った事はあるよ……。ただその人を本当に好きだったんだかどうか……。

そう入力して字面にして見ると、康祐クンの事が頭に浮かんだ。

あたしは本当に、康祐クンと渡仏するんだろうか。

1月になり、康祐クンの予定に則ってあたしは仏語のスクールに通い始めた。

週に2回の通学だ。

ウィークデイの街は、何だか時間に急かされる人々が多く、あたしには思わず迷いが生じた。

『あたしは今何してるの?』

それなりに自分の仕事があって6年も勤続した会社を去り、目の前にある余暇をあたしは持て余していた。

働いてる時は平日休みの人を羨ましいと思い、有給消化しなくちな、なんて思っていた筈なのに。

いざ自由な時間が与えられるとそれを消化できる程の能力や気力が自分に無い事を思い知らされる。

「香澄?!」

思わぬ場所で思わぬ呼びかけにあたしは歩みを止める。

振り返ると、コンビニの入り口からその制服を身に付けた一人の女性が手を上げていた。

ショートカットのその女性は、口を開けたままのあたしに苦笑いをして

「由梨だよ! 宮里由梨!」

彼女のフルネームを聞いて、高校時代の彼女を思い出す。

それでもそこに居る彼女とは上手く線が繋がらなかった。

確か彼女は長い髪を緩く纏め上げていたし、こんなに目もパツチリじゃなかった気がする。

由梨ちゃんは店の前の掃除をするべく、箒とちり取りを手にしていった。

「アンタ高校の時と全然変わんないね。直ぐ判ったよ。何、仕事休みなの？」

「うん・・・仕事先月で辞めたの。」

声や仕草で、ぶれていた由梨ちゃんが確固たる映像になる。

快活な話し方で10年振りの再会のブランクを感じさせなかった。

「辞めたって？何？？結婚？」

由梨ちゃんはあたしの身体の側面に垂れている手に目をやる。

「指輪してないか。」

鋭く目ざとい。

「結婚する事になって・・・辞めたの。」

「へえー！どんな人よお？携帯に写真入ってないの？？」

あたしは目を伏せて小さく頷く。

あたしと康祐クンの写真は一枚も無かった。

彼が『魂取られるから』と、頑なに撮影される事を拒んでいたのだ。

<11>

「へえ同じ会社の営業マンなんだあ。香澄がそんな男捕まえられるなんてね。」

あ悪い意味じゃないよ？アンタおっとりしてるじゃん。」

由梨ちゃんが言う事は鋭利だった。

「じゃあさフランスから帰ってきたら、男紹介してよ。コンビニでバイトする28歳も

どうよって感じでしょー？」

大きな口を開けて笑う彼女。

・・・きつと、彼女自身それほど深くは自分がバイトである事を思
い悩んでいない筈。

彼女の気が済んだのか程無くあたしは解放された。

詰めていた空気を大きく吐く。

空があたしの心と同じように、湿り気を帯びた灰色の雲に覆われて
いた。

グループレッスンを選んだあたしは宛がわれたBルームへと足を踏
み入れる。

英語や韓国語に比べると生徒は少ないらしく、オーバルのテーブル
に先生一人に対し生徒があたしを含め5人と言うクラスだった。

4人が女性で、ただ一人の男性は見た目も若く他の女性が興味を示
しているのが明白だ。

レッスンが始まると、家での復習の成果もあってか自分の中に眠っ
ていた仏語がすらりと出てきた。

それには自分自身も驚いたが、仏人の先生も『貴女何故、初心者レッスンに居るの?』と仏語で質問をされた。

他の生徒の視線も気になった。

・・・クラス変更をした方が良さそうだ。

初めてのレッスンが終わり、教室を一番最後に出るあたし。

「あの。」

声を掛けてきたのは、首からIDカードを下げた長身の女性だった。あたしは見上げて、彼女の開口を待つ。

「あたしスタッフの新井って言います。ちょっと時間あります?」

<12>

断る理由も予定も無いあたしは、彼女と連れ立ってミーティングルームと言う部屋へと案内される。

「ミッシェルが貴女はクラス変更をした方が良いつて事だったんだけれど。」

・・・わー情報が早い。

「入会の際に、日常会話が出来るようになりたいとの事でしたね・・・。」

”新井千夜・Chiyo Arai”とカードに記されている。

新井さんはあたしの申込書やチェックカードに何度か目を走らせる。

「どうされますか？」

新井さんは今此処での回答を待っているようだ。

「あ、あの・・・少し考え・・・。」

「週2回のクラスですね。では明後日木曜日のレッスンは今日と同じ初級コースで良いですか？」

あたしは委縮する。

このタイプの人には酷く弱い。押されると嫌と言えず、畳みかけられる言葉に対応出来ない・・・。

「あ。あの・・・。」

顔を俯いて目だけ彼女の方に向けると、彼女が左腕に嵌めた腕時計に視線を落とすのが目に入った。

あたしの対応の遅滞に苛立っているようにさえ見えた。逃げ出したい衝動にかられた。

新井さんが一つ大きく息を吐く。

あたしの目の前にパンフレットを広げる。

「初級コースの上には、中級コースと中級ビジネスコース、更に上

は上級コースとなるの。

野々原さんは、旅行に行くのかしら？」

彼女は投げだすのではなく、あたしの為に丁寧に説明を始めた。

「2年・・・フランスで、ワインセラーやブドウ園を回ったり、簡単な通訳・・・です。」

「ではビジネスの方が良いのかな？」

あたしがオドオドとしてるせいか、恐らくあたしよりも年下であろう彼女はあたしに砕けた口調で話し始める。

「売買を行う訳ではなくて、ワインの研修と言った感じです。」
彼女が頷く。

「では、中級コースにしませんか？初級コースの方は本当に挨拶からのレッスンになりますので」

野々原さんの場合、約3カ月と短い期間しかありませんからね。」
納得のいく説明と彼女の眼力に、あたしは快諾した。

<13>

「では、木曜日はミッシェルとは別の者が担当します。お時間は10時からです。」

あたしが申込変更書に記入後、新井さんが立ち上がった。あたしも倣って立ち上がると彼女にお礼を述べる。

「素敵な2年間になると良いですね。」

身支度を整えミーティングルームを出ると、新井さんは既に大きなバッグを肩に下げ帰るところだった。

ビルのEV前であたし達は動く箱の到着を待った。

「大きな荷物ですね。」

沈黙を破ったのはあたしだった。

「あはは。ジャージとかタオルとかそういうの入ってるんです。あ、あたし実は役者の卵で。」

「。」

何だか唐突過ぎるほどの偶然にあたしは固まった。

「?え、何か・・・どうしました?」

でもまさかそんな訳が・・・。

「あ。いえ・・・ごめんなさい。凄いなーと思って・・・。じゃあこちらはバイトですか?」

「そうなんです。まだまだ食べていける程の者じゃないから。」

目の前でEVの扉が静かに開く。

彼女が階下のボタンを押した。

「野々原さんは4月からフランスに行くんですか?素敵でしょうねえ。あたしヨーロッパには

行った事が無くて・・・。」

あたしははにかむ様に口元を綻ばせる。

1階に降りると米人と思しき男性が笑顔で新井さんにハグをする。英語も日常会話程度なら理解のあるあたしは、彼女達の会話に聞き入ってしまった。

「千夜、今度の公演観に行くよ。英語のガイダンスはついてないの？」

「残念だけどそれは無いの。けどウィルだったら解るわよ！解らないところは愛に聞けば

良いじゃない！」

「まあそれもそうだね。チケット4枚買うから、支払いは明日で良いかい？」

「勿論。じゃあ稽古に遅れるわ、又明日！」

・・・バイトというより、スクールの先生でも通る様な流暢な発音だった。

<14>

ヒロト…カスミいくつ？俺は26。大学中退してこの道に進んできたんだ。

二人の『二次元の恋愛』が始まって、あるフリーメールのメッセージャーと言うシステムを利用した。

フリーメールのメアドを利用するものだけれど、感覚としてはチャットに近いもの。

・・・やっぱり年下だった。

チャットルームの内容からいくと、一番のまとめ役でしっかりした印象を受けていたのだが自分とは微妙なジェネレーションギャップが有る気がしていた。

カスミ…28。大学出て酒造メーカーに就職したよ。・・・それもついこの間辞めたの。

ヒロト…辞めた？結婚するから？今時珍しいね？結婚を機に家に入るって。

カスミ…彼に辞めるように言われたの。実はフランスには「彼」が2年間の研修があって行くんだけど

あたしはその為の通訳と言うか・・・。

ヒロト…結婚決まってるんだもんね。でも6年勤めた訳でしょ？辞めずにフランスに行けたら

良かったね。愛着あったんでしょ？会社。

ヒロトにそう言われてあたしは、初めてその事について考えた。

”愛着”

会社に愛着……。どうだったかな。惰性の6年間だったかな。面

白くもあつたかな。

テキパキ動ける方じゃないから、営業部とか企画部とかは向いてない。

だから総務部で良かったのだと思うけど、誰かに感謝されるでもない。ただ”こなす”仕事を続けていたに過ぎない。

ただ会社の業種としては面白いと思っていた。

営業については最近、康祐クンから色々聞いていたし、スーパーや酒屋で自分の会社が仕入れた商品が並んでいるのはちょっと誇らしかったつけ。

カスミ…どうなのかな。正直判らない。あつたような無かつたよう
なって感じ・・・

ヒロト…ふーん・・・好きじゃなかったら6年も勤められないと思
うけどね

そうね、ヒロトならそう思うかもしれない。

貴方には、まっ直ぐに突き進む力とそれを行使する活力があるから。

「あの新井さん！」

あたしは今にも駆け出しそうな彼女を引き留めた。

今思えば自分でも良く、確証も無いのにそんな台詞を口にしたもの
だと思う。

由梨ちゃんの快活さ、新井さんの熱心さに引っ張られていたのかも
しれない。

「違ってたらごめんなさい。あたし”カスミ”と言います。・・・
解りますか？」

新井さんは面喰っている。

「・・・野々原香澄さん、ですよ？解ります・・・けど。」

あたしは新井さんの応対に、自分の失言を悔やんだ。

手にしていたバッグの取っ手を握り締めて、あたしは首を横に振る。

「ご・・・ごめんなさい、やっぱり人違いだったみたいです。すみ
ません行ってください。」

「あ・・・はい。では急いでいるので。」

新井さんは小さく会釈しビルのエントラスを抜ける。首を少し傾げ
ているのが見えた。

そうだよね・・・。

こんな広い街で、チャットルームの中の人が目の前に偶然にも現れ
るなんて無いよね。

はあ。

溜息を吐く。明後日、彼女と会いづらい雰囲気になっちゃったなあ。

小さく弱く歩みを進めるあたしの前に、大きな足音が近づいてきた。
思わず顔を上げると、息を切らした新井さんが

「カスミ?! あたし、チロル!!」
そう大きな声で、目を丸くして叫んだ。

あたしは凄く嬉しくて、自分が笑顔になるのが手に取る様に解った。
どうしてか・・・

由梨ちゃんとの偶然の再会よりも、チロルに会えた事の方が心が躍
動する。

「何この偶然っ!! あたし千夜^{ちよ}で、チョコレート好きがあって仲間
内ではチロルって

呼ばれたりするんだあ。」

彼女がビジネスの顔からプライベートの顔へと変化した。

あたしは彼女のその勢いに吊られるように、足早に駅へと向かい歩
いている。

先程、稽古場に来るかどうかと誘われたが丁重にお断りした。

チロルの劇団の主宰は、ユウ。

ユウの裏表無い殺伐な言葉を、あたしは恐れていた。

<15> (後書き)

お礼が遅くなりましたが、お気に入り登録して下さいの方
お読み頂いている方、励みになります。大変有り難いです。

これからも精進して参ります。

*** 壬生 ***

久しぶりに、大学時代の友人からメールが届いた。

香澄？結婚するんだって？色々話、聞きたいから会おうよ！
美和と民子にも声掛けるからー。今度の土曜日、空けといて。

家が近くで幼稚園の頃から仲の良かった、千里子からだった。

チリともずっと一緒だったけれど、社会人になって生活の時間がずれて、ちよっとずつ疎遠になってしまっていた。

親友と呼べる筈だったのに・・・。
何処でどう違ってしまったのだろう。

「香澄？」

又、甘い香水をあたしの身体に纏わせる康祐クン。

後ろから抱きすくめられて、彼の吐息が首筋をなぞる。

「どう？スクールは？」

2週間振り・・・。

” 婚約中 ” である筈の康祐クンと会うのは2週間振りだった。

彼のマンションは、想像していたよりも整頓されていた。

キッチンの流しの脇に、これ見よがしに髪留めのゴムが置かれている。

「うん・・・思ってたより覚えてたみたい。」

「そっか、香澄は凄いな。」

康祐クンの手によってあたしは、康祐クンに対し向き直され直ぐ目

の前に康祐クンの顔が近づいていた。
あたしは目を閉じ、想った。

この人があたしに求めているのは、あたしの心では無い。

なのに何故あたしは彼を拒否しないの？

彼を、愛している？

彼に「付き合わない？」と言われた時は有頂天だった。

憧れの彼からの告白に舞い上がらない女性はいないだろう。

だけど、彼の傍に歩み寄れば寄る程、自分が創り上げていた康祐クンが脆く崩れて行った。

彼は優しい。優しいけれどそれはあたしに見せるほんの一部分にしか過ぎない。

生活態度はお世辞にも良いとは言えず、あたしをモノの様に扱う夜を強制する事も多々あった。

そして、悲しいかな。それに抗えないあたしが居る。

「必要無い」と言われる事が怖かった。

だからあたしは彼に縋ってた。

歳を重ねていたあたしは「彼を失ったら・・・」と不安の渦に飲み込まれていた。

<17>

ヒロト…チロルに会ったって？

心臓が跳ねる。

何てチロルはヒロト達に言ったんだろう。

ヒロトとの時間が欲しくてあたしはチャットには参加しなくなっていた。

ヒロトがバイトで端末を開けない時、たまに顔を出す程度。

カスミ…うん。ランゲージスクールのスタッフがチロルだった、吃驚した。

チロル何か言ってた？

ヒロト…何かって？

カスミ…ブサイクだったとか冴えない女だったとか・・・

ヒロト…言う訳無いし、思ってもないと思う。てかどんだけ自分下げの、カスミ>

カスミ…・・・だって本当のあたしはそうだし・・・

ヒロト…俺は此処でカスミと話してて、冴えない女とか思った事ないよ。

カスミ…ヒロトは誰にでも優しいから、そう思うんだよ。

ヒロト…誰にでも優しい？ 何でそう思うの？

何でって・・・。

だって初めてチャットに参加したあたしを氣遣って声を掛けてくれて、それからもあたしの話を聞いてくれて、それから・・・こんな恋愛ごっこに付き合ってくれてる。

ヒロト…俺の事未だよく知らない内にそう決めつけるのは早計だよ。
カスミ…でも、こんな事に付き合ってくれるなんて・・・
ヒロト…彼氏と何かあったの？

え……。何急な話の転換。

あたしはキーボードの上で手を止めた。
未だ迷っている。

康祐クンの事をヒロトに話す事を。

誰かに聞いて欲しくて誰かに何か言って欲しくて始めた”繋がり”
だった筈なのに、直面してやはり怖くなる。

言ったところで、あたしの心を理解して貰えるのか。

顔も知らない赤の他人に、恋人の愚痴をこぼして、あたしは平然と
康祐クンの前に立てるのかどうか。

どうして、あたしはこうも覇気が無いのだろう。

いつも愚図で優柔不断で、誰かに縋ろうとするんだろう。

静止する事に疲れた指が落ちる。

スラスラと偽りの言葉を打ち出す。

カスミ…何も無い。ただ不安なだけ、このまま結婚して良いのかな
って。

本当はそうじゃない。

「結婚」が不安なんじゃない。康祐クンとの未来が不安。

他に女が居るような男、あたしを存外に扱い利用するだけ利用しようとしている男。

確かめる事も抗う事も出来ないあたしの未来は、闇の中にある。

チリに呼び出されたカフェ。美和と民子に会うのは大学の卒業式以来の事。

「久しぶりー！」

チリは既に一児のママで、何だか今日の為にファッションとメイクに力を入れてきたように見受けられた。

美和は「7カ月なの」少し膨らんだお腹を擦る。その左手の薬指の結婚指輪がきらりと光る。

民子は今でも仕事を続けていて働く事に生きがいを感じているように見える。

あたしは直ぐそこにあるガラスに目をやった。

これが婚約者とフランス行きを待つ女の顔だろうか。

「で？相手幾つなの？」

「恰好良いの？」

「式は何時やるの？」

矢継ぎ早の質問にあたしは苦笑いをする。小さく答えを返していく。三者三様の反応だった。

チリは怪訝な顔をして

「それって何にも決まってないのと同じじゃない？婚約指輪とか貰ったの？」

と言う。母ともなると鋭いとも言えるべきか。

美和はあの頃と同じ様に樂觀的だ。

「フランスかー。良いなあ、あたしも住みたいなあ。香澄、喋れてたもんねえ。」

「独り身のあたしとしては羨ましい・・・様な気もするわ。」
と民子。

”羨ましい”と言われ、あたしは心の中で「そうかな」と安心する。人並な事が『通行証』。そのまま進んでいいって言われた気になる。あたしは、”間違える事”が怖い。

人の幸せはそれほど興味が無いのか、チリ達は自分達の話をし始めた。

姑が煩い、妊婦なのにセックスをしたがる旦那、男尊女卑の上司・・・。

どうしてこんなに愚痴が溢れ出るのだろう。

数年振りの再会なのだから、あの頃は楽しかったねと何故明るい話題をしないのだろう。

そうか・・・。

この子達も今の自分が、夢見た自分では無いんだ。

<19>

中級クラスの講師はエマと言った。

今、この時間の中級を取っているのがあたしだけらしく、嬉しくもマンツーマンレッスンとなった。

なのでレッスンと言うよりは、友達同士が日常あった事をお喋りしているのと、同じだった。

「カスミ、発音良いわね。充分今でも生活には支障が無いと思うわ。もし解らない単語とか

あったら聞いて？次のレッスンは火曜日の10時からよ。」

「解りました。じゃあ又来週。」

エマがルームを出た後、あたしは電子手帳を閉じた。

ミッシェルよりエマの方が訛りがあるなと感じた。ネイティブだと言えばそれまでだけれど。

「香澄。」

ドアがノックされたので顔を上げると、チロルがそこに立っていた。

「あたしこれからランチなんだけど、良かったら一緒にどう？」

「あ、うん。」

「何が食べたい？」

「・・・何でも良い。あたしこの辺よく知らないし。」

「そ。じゃあ近くにスペイン料理屋があるからそこで良いかな。パエリア美味しいんだよ。」

チロルはあたしよりも背が高くて、背筋もきちんと伸びていて、あたしは自分の見劣り振りに更に小さくなる。

「皆に香澄に会ったって言ったら、皆も会ってみたいって言ってた

よ。」

E Vに乗り込むと彼女が笑顔を向けてこう言った。

「オフ会って言うか、ただの飲み会なんだけど今度やる時来ない？」

「あたし・・・飲めないから・・・。」

俯くあたしにチロルの視線が注がれてるのが解ったがあたしはそれに徹していた。

彼女は「そっか」とだけ言った。

彼女に案内されて入ったお店はスペイン料理屋と言うほど堅苦しくもないカフェに近い店の造りだった。

観葉植物の直ぐ傍のテーブルに腰を下ろす。あたしは隣の空席にレッスンバッグを置いた。

店員にお薦めのパエリアを注文し、あたしは出されたお水に口をつけた。

ヒロト…好きな人と結婚出来る事に何で不安になるの？俺、それが不思議。女の人ってよく

マリッジブルーになるとか言うでしょ。どういう心境なの？

だから・・・あたしの場合、マリッジグレー／ブラックな訳で・・・。
マリッジでも無いか・・・。

カスミ…この人とで本当に大丈夫なのかなって。相手の両親とうまくやっていけるのかって・・・

独りの時間が惜しくなるのかもしれない。

ヒロト…そういうものかな・・・。男が結婚を決めた時はそんな不安は既に無いと思うけど。

あ、ねえカスミの部屋から外見える？月が綺麗だよ

あたしはベッドを振り返る。そこに腰高窓がある。立ち上がりあたしはカーテンを引いた。

直ぐ隣の家の灯りがカーテン越しに見える。

窓を開けて身を乗り出しても、あたしの部屋の窓からその綺麗なものは見当たらなかった。

1月の冷たい空気が肌を差しあたしは身震いする。

窓を静かに閉めると、あたしは又パソの前に腰を据えた。

カスミ…うん、凄く綺麗だね

吐く必要も無いのに、あたしはヒロトに同調する為の嘘を吐く。

あたしは、どうしたいのだろう。

あたしだけを見て欲しいと、必要として欲しいと懇願しながら、あたしの中に入って来られる事を全力で拒否しようとしている。

あたしが、流れに身を任せる事は何でも無い。

今までだってそうだった。だけど、あたしの流れを乱して欲しくない。

あたしの中に流れ込んで、あたしを見て、嘲り笑われるのが怖い。だったら流れた方が楽。

ダメだしをされるより、沈黙を守って惰性で生きて行く事の方がよっぽど楽だ。

ヒロト…離れてても同じものを見て、同じ様に感じられるって凄なことだね。

ヒロトのその一言に、わが身を恥じる。

この純粹さがあたしを救ってくれると願った筈なのに、あたしは今正にそれを放棄しようとしている。

<21>

「2年もフランスに行けるなんて会社の研修か何かなの？」
チロルがオーダーしたアイスティーにガムシロを入れながら聞いてきた。

康祐クンが。

「あ、うんそうなの。」

「会社は？今どうしてるの？」

「うん、会社の方からフランス語マスターする様に言われてて……」

あたしは嘘に嘘を重ねる。

「へえ。凄い会社だね。普通、語学研修だったら社内でも良いような気がするけど。」

今度うちのマネージャー、香澄の会社に営業に行かせようかな？
チロルの行動力ならそれもあながち嘘じゃない気がする。あたしは頭を振った。

「あたし、あの偉い人のお付きみたいな感じで行くから……特別
粹って言うか……」

「ふーん。」

その時だった。

聞き覚えのある携帯の着信音が出入り口の方から聞こえてきた。
それは後ろを振り向くのも躊躇われる程。

あたしはお水の入ったコップを力を入れて握り締めた。身体が強張る。

「はい栗原。あー関部長お久しぶりですー。」
康祐クンの営業用の声が聞こえてきた。

「香澄？」

目の前からチロルの声がしたけど、あたしは目を閉じて耳を研ぎ澄ませて後ろの声を拾おうとする。

「関部長、お前をいたくお気に入りだな。」

「この前飲み連れて行ったの、アズミの事気に入ったみたいでさ。」

「お前の根回しに感服するよ、流石我が営業部のトップだな。でそのお前が結婚とはなあ。」

「結婚？」

康祐クンの鼻で笑う癖。本当に人を馬鹿にしているように聞こえる、その癖。

「2年後になってみないと分かんないだろ？」

「エグイっ！お前鬼畜だな！」

同席しているのは康祐クン、あたしと同期の小嶋クンだろう。

「しかし野々原の何処が良かったの？」

あたしの名字が聞こえて来て、あたしはチロルの顔を窺った。

彼女はあたしの態度と後ろから遠慮無しに聞こえてくる話題から、声の主達に目を馳せる。

<22>

「何処？・・・面倒臭くないところ？」

「はー？何だソレ。」

「総務の庄野って居るだろ？すげーお嬢様ぶってる。あいつと寝たんだけど・・・。」

「いや寝るなよ。会社の女程面倒な事ねえだろ。」

「据え膳食わぬは男の恥って言うだろ。何か一緒に飲んだ時に、つい戴いちゃった訳よ。」

小嶋クンがかなり笑っている。

「でさ、そいつが相当しつこい訳。超ヤリマン。倉庫に呼び出されてシヨ？とか言われて

ドン引きっ！で何とか逃げようと思ってたところに、香澄見つけちゃった訳よ。」

小嶋クンの更に下品な笑いが耳を劈かんばかりだった。

「庄野が変に対抗心燃やすような女じゃねーじゃん、香澄じゃ。でさ、その頃俺のフランス研修の打診が

課長から有った訳。あいつさ語学堪能って聞いてたから、今後遣えんじゃねーの？みたいな感じで

此処に至ってるってとこかな。」

「・・・俺、お前と友達で良かったよ。うわぁ野々原、可哀想っ。」

「可哀想かよ、俺みたいな男と夢見れてんだから良いんじゃない？」

あたしは両手で耳を塞ごうとした。

それをチロルが遮った。

正気？とあたしは彼女の顔を見上げる。

彼女は強い目であたしに訴えかけていた。

『貴女にはこれを最後まで聞く必要がある』

とでも言いたげだ。

「うわー俺様ー！お前、何時か死ぬぞ。」

「庄野には刺されそうな気がする。」

「は？何、結局続いてんの？」

「うーん、何か手放すには勿体無い相性なんだよね。体が。」

小嶋クンが手を一度叩いて爆笑している。

「おめーもヤリチンじゃねーかよっ！」

「まだ良いんだって。今度セッティングしてやろっか？庄野との一夜。」

「俺やだね。お前とキョーダイとか。・・・しかし野々原、それ気付いてないの？お前の企み一部始終。」

「あの女、馬鹿だし。気付いてねえんじゃね？俺と結婚出来ると思っ
って今頃、頑張っ

て語学勉強でもしてんだろ。」

あたしはチロルに殺気さえ覚えて、彼女を睨みつけた。

あたしは”聞きたくなかった”。

テーブルに置かれたパエリア。

味なんて判らない、判らなくて良い。早く、この椅子から立ち上がりたい。

のろのろとスプーンを持ち上げても、湯気の立つそれを救う気力さえ無い。

スプーンが音を立てて落ちた。

相対してチロルは規則正しく、食物を口に運び込む。

後ろに康祐クンの気配を感じる。

店員があたしに新しいスプーンを差し出した。頭を少しだけ傾ける。

「良いの？」

ふいにチロルの声がしてあたしは顔を上げた。

彼女はスプーンの手で、あたしの背後を指した。

「帰るみたいだよ。」

後ろで椅子が引かれる音がする。あたしは体を硬く、小さくした。その気配が消えるのをあたしはただ、黙って待った。

嵐が去ってチロルの盛大な溜め息が漏れる。

「何か・・・良く解らないけど・・・何か言った方が良かったんじゃないの？」

チロルが呆れたと言わんばかりの声色で、冷たい眼差しをあたしに向けている。

何が、偉い人の付き添いよ・・・。

何が、会社からマスターする様に言われてるよ・・・。

「わ・笑って良いよ。馬鹿な女だって・・・。」

嘘を吐いた事が、嘘だとバレた上に、結婚詐欺まがいの当事者だなんてお笑い草ね。

「笑えない。むしろ苛々してる。香澄に。」

チロルはスプーンを皿の上に乱暴に放り出した。

「さっきの、野々原香澄って貴女の事だよね。で？あの男は、貴女に結婚ちらつかせながら

自分の良い様に利用してる、更に、別に女も居る。しょーもない男ね。何で？何で

そうやって普通に居られる訳？」

それはミス一つない100点満点のテストみたいに完璧な回答だった。

普通じゃないよ。

うん普通じゃない。

だって、あたしは、康祐クンがあたしを利用してるって解ってるんだもの。

だって、そうでしょ？

あたしを愛してるなら、何故全てを帰国後にしようとするの。

あたしを大切に想うなら、何故あたしの声を聴こうとしないの？

重い体を何とかパソの前に用意する。

何時ものフリーメールにログインする。

今日は・・・とてもヒロトと話す気になれなかった。

メールを新規作成して、「今日は疲れたので寝るね」とヒロトのメアドに送信する。

木製の椅子の背凭れに体重を掛けてあたしは目を瞑った。

心の何処かで認めたくなかった、康祐クンの悪行。

認めなかったら、咎めなかったら、あたしがそれで良いんなら、良いんじゃないの？

例え結婚出来なくなっても、フランスに2年も行けるんだよ。

勿論、渡航費は自費だけれど、アパートメントは康祐クンと一緒にだから会社持ち。

大好きなフランスに行けるんだよ。

それで良いんじゃないの？

あたしはノートパソコンのキーパッドに指を宛がい、更新する。

新着メールが1通届いていた。

ヒロトからのメールだった。

カスミ。

了解。俺はいつものところに居るから、もし余力あれば、おいで

ヒロト

「ヒロト・・・。」

ヒロトは何時だって、あたしの声に耳を傾けてくれる。

・・・そう、だって彼はカスミの恋人。

あたしは、たった今この刹那、カスミに嫉妬する。
ヒロトの恋人、カスミが恨めしく思えた。

マリッジブルーを気取った28歳の、二次元のカスミ。

自分からコールしたゲームを無効にしようとする嘘の数々。

あたしは何をしたいの、どう生きたいの。

薄汚れた天井を見上げた顔を両手で覆う。脳裏に浮かぶ、ヒロトが見た綺麗な月。

あたしも見たかった。

同じものを見たかった。同じように感じたかった。

嗚咽が漏れる静かな部屋。

思い出されるチロルの言葉。

『苛々する、香澄に』

「あーっ!!ー・・・っっ!!ー」

あたしは椅子から転げ落ちるようにして、ベッドに突っ伏す。

声を殺して、溢れる涙を閉じ込めて、

自分を殺して、素直な感情を麻痺させて・・・。

「香澄、こっちおいで。」

康祐クンがリビングのレザーソファの上であたしを呼ぶ。味見しかけたお味噌汁の中にあたしはお玉を沈めた。

ガラステーブルの上には、2件のアパートメントの資料が並べられている。

「どっちか選んで良いんだって。香澄はどっちが良いと思う？」
「どちらも特に変わり映えはしない。」

「康祐クンの良い方で良いよ？」

「うーん、フランスのアパートってこんなもんなの？」

「外国はこんなもんじゃないかな。会社もそんなにお金出してくれないでしょ。」

物件資料を見ただけで既に康祐クンは不満だらけの様子だった。

「じゃあさ2年も行くんだし、俺と香澄で金出してさ、もう少しまともな部屋にしない？」

「・・・え？」

「香澄だって全く金無い訳じゃないでしょ？実家に居るんだし。」

この人は忘れてしまったのだろうか。

あたしに会社を辞めろと言った事を。あたしに今収入が無い事を。渡航費も向こうでの生活費もあたしが自費である事を。

「・・・向こうのアパート、ネットとかで調べてみようか？予算とか？」

「うん、そだね、そうして。」

その時彼の携帯の表面がピンク色の点滅を始めた。

「あ悪い。」

康祐クンは携帯を持ち立ち上がるとベッドルームへと体を滑り込ませた。

あたしは資料をかき集め、端を揃えた。

「いっ……。」

コピー用紙があたしの指に小さく短い痛みを齎^{もたら}した。

痛みを凝視する。裂けた筈の皮膚を探し当てる事が出来なかった。

暫くして切り口から赤い血がじわりと滲む。

流れる事も垂れる事も無い、滲むだけの血液。

鋭い痛みだった筈なのに今は何て事無い。

康祐クンにかかってきた電話は、5分が経っても終わらなかった。

あの髪留めの女性^{ひと}かな……。

土曜の朝、洗面所で顔を洗っていると妹の清香さやかが声を掛けてきた。

「お姉ちゃん、向こうにパス持って行く？」

あたしはタオルで水滴を押し拭く。

「ううん、どうして？」

「あたしの調子悪くなっちゃってさ。あたしに譲って貰えない？」

「・・・ん良いよ。」

「サンキュー！」

清香は上機嫌で台所に向かった。

4歳下の彼女は”妹”だからなのか小さい時から要領が良くて、友達も多くて、お母さん達にも期待されていた。

鏡の前に、化粧水を撫でつけてあたしも台所に歩みを進めた。

「お母さん来週からお弁当作ってくれない？」

清香がお母さんにすり寄って言う。

「自分でやりなさいよ、アンタ24にもなって！」

「朝そんな時間無いもんっ。ゴールデンウィークに友達とサイパン行こうって事になってね。」

貯金とかしたいからさー、ねお願い？」

「解ったわよっ！アンタ先月の生活費もお母さんに払ってないの忘れないでよっ！」

「ボーナスで払うからっ！ありがと、お母さん！頼りになる!!」
彼女は更にご機嫌な笑顔でお母さんが用意した朝ご飯にありつく。

あたしも自分の茶碗にご飯をよそる。

「お父さんは？」

あたしが聞くとお母さんは「ウオーキング」と答えた。

最近ちよっと太ったって気にしてたな、そう言えば・・・。

空席の位置に視線をやる。

4月になったら、あたしはこの家には居ない筈で、今のこの席が当たり前のようにぽっかりとあたしの不在を告げるんだらう。

お父さんの新聞が置かれたり、お母さんのエプロンが置かれたり、もしかして清香のバッグが置かれるのかもしれない。

あたしが居なくても、この日常は変わらない。

あたし一人が辞めても会社が変わらないのと同じ。

「清香、お弁当良かったらあたし作ろうか？」

愛着のある去る場所にせめて何かを、自分の痕跡を残したいと思うのは、あたしだけだろうか。

パソコンの電源を入れてあたしは先ずメールの確認を行う。
新着のメールは何も無かった。

ヒロトからの木曜の夜のメールが一番上に表示されている。

あたしは少しがっかりしてお氣に入りに登録してるサイトをクリックする。

”わいわい”というチャットルームを更にクリック。

ヒロトとチロル以外のメンバーがそこに居た。

入室しようとディスプレイ上の矢印を移動させていると、そこにカスミの名を見つけた。

ユウ…カスミ結婚詐欺に遭ってるらしいぞ

オザ…は？何だそれ

アンジー…それあたしもチロルからメールで聞いたけど・・・ユウにも言っただんだ？

アツシ…詐欺って何だよ

ユウ…付き合ってる男に結婚を餌に利用されてるっつー話だった、よな？

アンジー…ごめんあたしその話パス。落ち>all

管理人…アンジーさんの発言はクリアされました

ユウ…ってオイ!!

あたしは目を疑って仕方ない。

会ったことも無い、友達でも無い端末の知り合いが香澄あたしを語っている。

「閉じる」も「シャットダウン」も選択できないあたしは、結局そ

れを目で追ってしまった。

オザ…ユウ>お前もクリアした方がいいぞ、カスミ見たら卒倒だろう、てか居たらどうすんだ

アツシ…ヒロト来たら相当怒^{いか}んべ、アイツこーゆーの一番嫌いじゃん悪口とか

ユウ…チョットマテ、チロルから電話来た。

数分明けてユウがチャット上に戻ってくる。

ユウ…ヒロト見てたよ、コレ。ヒロトからチロルに電話行った。

オザ…ヒロト何て。

ヒロト…ルール違反だし、人としてどうなんだよ。

「ヒロト……。」

ユウ…悪口じゃねーだろ、事実を言ってるだけだし。

ヒロト…チロルもそう言ってた。事実だったらこんなところで吹聴して良いのか。

オザ…ちよつと待って！熱くなんなって

ユウ…・・・悪かったよただ…・俺もチロルも我慢なんねーんだよ、そーゆーのが

ヒロト…騙されてる事が？曲がってる事が？

なあ…・目に見えてる事だけが真実じゃないって解る、

ユウ？

アツシ…止めようよ、ここで喧嘩とか

ヒロト…悪い、暫く来ない>a11

管理人…ヒロトさんが退室しました

ユウ…わざとって言いたいのかよ

ユウ…って、落ちてんじゃねーぞ！！くっそ俺もオチ>a11

それでオザとアツシも退室していつて結局ルームには、ROMするカスミが残った。

我に返ってあたしは頬に伝う水滴を指の腹で拭う。

ヒロトの言葉にあたしは、救われた。

助けてくれた。

解ってくれた。

アタシを見てくれていた。

チャットのサイトを閉じてあたしはすぐさまメーラーを開く。

一通の新作メールがトレイにあった。

ヒロト。

マウスを性急に移動させてそれを確認する。

カスミ

話したい、電話して。何時でも良いから。
090—・・・

ヒロト

電話・・・？

それは山肌を駆ける雪崩のように押し寄せてきた。

ヒロトの声が聞けるの？繋がって良いの？

あたしは傍にある携帯を開いて、指を宛がう。

本当に？

電話したら、繋がったら、きっと嘘は吐けない。

ヒロトはうまくあたしの流れの中に入り込んでくる。

そうになったら、あたしは全てを曝け出すに決まってる。

弱くて脆くて愚かな自分を。

カスミではない、香澄を。

それでも、

勝まさってしまったんだよ。

あたしを支えようとしてくれてる彼の声を聴きたいという想いが。

霞む目を何度か擦ってあたしはヒロトへ通じるコードナンバーを丁寧に入力した。

数回のコールの後、聞こえてきたのは少しハスキーな、彼の声。

「カスミ？」

忘れていた呼吸を開始するあたしの体。

入り組んでくる空気と、ヒロトの声。

やっと会えたね。

「今日チャットに行った？」

思ってたより声が高くて、思ってたより口調がゆっくりで。

「行ったよ、ロムってた・・・ごめんね、ずるいね。」

「ずるいって・・・謝るのはこっちでしょう？」

苦しげに聞こえてくるヒロトの声。

知ってる？君の声を聴いただけで、あんなに騒がしかった流れが穏やかになっている事を。

「勝手だけどチロルもユウも悪気じゃないって事だけは解って欲しいんだ？あいつらは

本当に真っ直ぐで社交辞令とかも嫌いな人間で・・・カスミの事聞いて凄く齒痒かった

んだと思うんだ・・・。」

うん解るよ？

チロルがあたしに苛々するって気持ち、解ってる。

「カスミ？・・・これからは本当の事話してくれない？チロルやユウからじゃなくて、カスミの口から

ちゃんと聞きたい。ずっと彼の事疑心暗鬼だったんでしょ？だから・・・。」

「うん、だから想われたかった。純粹に、あたしの声を聴いて欲しかった。あたしを誰よりも

必要として欲しかった。だから・・・ヒロトに想われたかった。

友達としてじゃなくて。」

時間のズレた友人達は希薄で、集まるだけの家族は安心だけど満たされなくて、義務で抱く彼の腕の中は氷河の中に居るみたいで、心は休まらなくて自分自身も見失って、やっと見つけたのがヒロトだと言ったら、貴方は笑いますか？

きつとヒロトは優しく受け止めてくれる。

あたしはそう確信しているよ。

「今度チロルに会ったらちゃんと話すつもり……。」

「チロルも少し反省してたから。」

”少し” って言ってしまうところがヒロトらしいと思った。

過剰に優しくない所が、本当の優しさだとあたしは思う。

「カスミ？電話ありがとう。」

きつと電話の向こうではにかむ様に笑ってるヒロトが居る。

あたしは目頭が熱くなった。

「ヒロト、ありがとね……あたし……ううん何でもない。」

あたし救われたよ。

携帯の決定ボタンを押して登録完了。

あたしの携帯で久々に番号登録の機能が使われた。

「湯浅尋人。ゆあさ ひろと」

携帯のメアドも交換してあたし達は少しずつ距離を縮めていた。

火曜のレッスン終了後、あたしはスタッフの中にチロルの姿を探す。
何をどう話せば良いのか解らない。

でもこの件についてチロルと話をしない訳にはいかなかった。

ヒロトの為に、チロルと話さないといけない。

それは、小さな使命感だったのかもしれない。

「香澄……。」

今出勤してきたばかりのチロルだった。

「……話、したいんだけど……。」

「今日はこれから通してバイトなの。終わるの21時なんだけど、
それから会える？」

チロルもあたしと面と向かって話す事を望んでいるようだった。

「……解った。」

あたし達は赤外線でメアドの交換を済ませた。

街をぶらつくのもウィンドーショッピングをするのも下手なあたし
は結局、家に帰宅する事にした。
普段通らない道を歩いていると、幼稚園バスを見かけた。お揃いの

帽子にお揃いの制服に身を包む小さな子供達。

あの子達にどんな未来が待ってるんだろう。

園バスがあたしとすれ違う時、一人の園児があたしを見ていた気がした。

真偽を確かめるようにあたしは振り返ってバスを見送る。

あの子の未来が、明るいといい。

あたしの様にくすんでいなければいい。

あたしの様に、ヒロトに会えるといい。

家に帰り着くとパート帰りのお母さんと玄関でばったりと出会う。

「早いわね香澄。」

「・・・うん夜ちよつと出掛けるから一度帰って来たの。」

「栗原さん?」

又、お母さんの嬉しそうな顔だ。

よっぽどあたしの”結婚”が嬉しいのだろう。

「ねえお母さん、あたしの小さい頃の夢って何だったかなあ。」

「何よ急に。夢ねえ・・・あ、あれよアレ。人の役に立ちたいとかって。」

「・・・職業とかじゃなくて?」

お母さんは肩を竦めた。

<31>

玄関で靴を脱ぎ、揃える。リビングに入るとあたしはコートを脱いだ。

お母さんもそうして、薬缶にお水を加える。そのままガスコンロに火をかけた。

「アンタ高熱出して、病院に連れてった事があってね、その時の看護婦さんが若くて優しくってね。」

その影響かアンタ、人の役に立ちたいって幼稚園の先生にも言ってたし、小学校上がって直ぐにも

作文で書いてた気がするよ。」

お母さんは、何時だったか清香と二人でお金を出し合って買った赤い色のエプロンを首から下げた。

それは何度も何度も水流に揉まれて色落ちしていた。

「ふうん。・・・あたし洗濯物やっとくよ。」

「そお？じゃあ終わったら大福でも食べようよ、お茶淹れるから。」

お母さんはスーパ一の袋からそれを手にして、満面の笑みをくれた。

それは本当に些細で、小さな幸せ。

2階のお母さん達の寝室からベランダに出る。ピンチから丁寧に洗濯物を外し、部屋へと放り込む。

「人の役に立つ・・・かあ。」

例えば？

看護婦？警察官？消防士？

ああ・・・やっぱりあたしって発想力が乏しいな。

しかも、それは今から無理でしょう。・・・なりたいたいと思えないし。

洋服は簡単に畳んで、それぞれの部屋に置いていく。

バスタオルやハンドタオルを持って階下に行くと、お母さんが玄関に立っていて何だかその口元が綻んでいるのが見て取れた。

「どうしたの？」

「え？ ああ・・・鍵掛けたかなって思ってたんだけど・・・靴、アンタ何時も綺麗に並べるのよね。」

「教えた事無い筈なんだけど。」

「え？」

「清香は絶対脱いだら脱ぎっぱなし。アンタは教えなくても色々やってくれたわ。・・・何処に

お嫁に出したって恥ずかしくない子だよ。」

そう言ってお母さんはほんのちよつと寂しそうな、悲しそうな笑顔を残してリビングに消えて行く。

あたしは手の中のタオルをタオルケースに入れて、お母さんの後を追う。

「お母さん・・・あたしが結婚するの、嬉しい？」

お母さんは急須に葉缶からお湯を注ぐ。玄米の香ばしい匂いが立ち込める。

さっきの台詞が照れくさいのかお母さんは顔を上げずにこう答えた。

「娘が好きな人と一緒になって幸せになるのを喜ばない親は居ないでしょ。」

あたしは奥歯を噛み締める。

それは、どんなに幸せな「言葉」だろう。

それを本当にその状態で聞いたら、どれだけ素直な気持ちで涙を流せただろう。

今のあたしは、お母さんのその言葉が痛い。

「香澄？」

そっか、お母さんはあたしの”結婚”が嬉しいんじゃない、あたしの”幸せ”が嬉しいんだ。

あたしは堪え切れなくて、瞼を伏せると涙が頬を伝った。

お母さんが湯呑を二つテーブルに置いて、あたしの肩に手を乗せる。「どうしたの？」

あたしは心配かけたくなくて、泣きながらも顔を上げて口角を上げる。

「えへへ・・・大福食べよっか。」

お母さんは2枚も3枚もティッシュを掴み取り、あたしの顔に突き

出してきた。

「ありがと。」

お母さん、ありがとう。

あたし

幸せに、になりたい。

本気でそう思えた一瞬だった。

子供の幸せを願わない親は居ない。

だったら、あたしはそれを放棄しちゃいけないよね？

チロルからのメールによって、あたしは21時10分に歓楽街の一角の小さな居酒屋に呼び出された。

店員に待ち合わせの旨伝えると、奥の席を案内される。

仕切りの為の紺の布を手で押さえ、居るべき筈のチロルを探すとそこに一人の男性が座ってジョッキに口を付けていた。

あたしの鼓動は一気に速度を速める。

「香澄？」

後ろからチロルらしき声がして、あたしは何とか正常を保とうとする。

目の前の男性が、あたしを通り越してチロルに目をやる。

「あ、もう来てたんだ。」

「先に飲ませて貰ってるわ。」

その声の感じと、放つオーラで恐らく彼が”ユウ”なのではないかとあたしの脳が判断する。

「香澄？座って。」

あたしの前には、チロルとユウが屹然と座っていた。

軽いショック状態のあたしを見兼ねてチロルが小さく頭を下げた。

「ごめん、勝手に呼んで。」

一対一で話すものだと思込んで、小さな使命感を燃やしていたあたしは冷や水を掛けられた思いだった。

「俺は近藤友也。ユウね。・・・今日はこいつとカスミが話すのをロムるつもりで居るから。」

ユウがチロルを横眼で見る。

チロルはあたしを直視する。あたしはそれから逃げる。

目の前に置かれたウーロン茶に手を伸ばした。

ユウは「おっちゃん生一つ」と2杯目をオーダーした。

「香澄は、あの男とフランスに行くんだよね？それって・・・利用されてるって解ってても

行くって事なの？それとも約束した後に、あの男が下劣だって事が判った訳？」

ユウが居る事は納得出来ない。

でも、話をしなければ終わらない。

「あの人、康祐クンって言うんだけど・・・あたしと同期の人で付き合ってた・・・でも

凄くモテる人で・・・付き合ってる人があたしだけじゃない事は判ってた。だけど彼は

あたしと居る時が一番落ち着くって言うてくれて・・・あたしはそれを信じてた。」

「信じる程好きなのね？」

チロルがグラスの氷をマドラーで攪拌する。紫色の液体が螺旋状に舞い上がる。

「香澄？」

質問に即答出来ないあたしにチロルの声が耳を刺す。

即答出来ない事が、あたしの答え。

チロルの盛大な溜め息が聞こえる。

「その男と歩こうとする道を選択して、それが正しいのか間違ってるのかなんて、このスタート

時点では決められないと思う。だけど・・・ただ一つ言えるとしたら、香澄がその男と

歩いていくんだって強い意志がなかったら成り立たないよ?!」

幸せにならずにちゃって思えたのはほんの数時間前。

なのに今はもう足が竦んでる。

あたしが康祐クンとフランスに行かないで、一体あたしは何をするの？

あたしに何が出来るの？

<33> (後書き)

ご無沙汰振りの更新です。
又、宜しく願います。。。

*** 壬生 ***

惰性だって何だって6年ってキャリアを積んだ会社もあたしに手を差し伸べない。

何ら取り柄もないあたしがこの就職難時代、どうしたら良い？

由梨ちゃんみたいにコンビニ？・・・向いてない。やる気も無い。興味も無い。

康祐クンとフランスで過ごす間に、彼も本当にあたしを必要としてくれるかもしれない。

うまく行けばそのままフランスに移住だってありえるかも・・・。

心の奥で思考する夢物語にあたしは鼻から笑いを洩らす。

康祐クンは間違いなく、2年のあたしの”通訳”^{しやく}が終わってあたしを厄介払いするだろう。

一緒に住んだらあだった、こうだったと性格の不一致を周囲に漏らせば良いのだ。

彼の経歴に傷がつく訳ではない。
端からその予定なのだろう。

馬鹿な女。

あっさりと彼の筋書き通りに退職願を書いた女・・・。

何も持っていないあたしがこれから生きてく為に、男に縋ろうとした事がそんなにいけない事だろうか。

「・・・あたしはただ・・・踏み外したくなかった。普通の道を普通に歩いて行きたかった。」

やっと喉の奥から出た答え。

「踏み外さないんじゃないの？　踏み出せないんじゃないの？　誰だって後悔はしたくない。」

「チロルの言う事は正当、正論だけど・・・綺麗事だと思う。」

「・・・そうだね。そうかもしれない。でもあたしは香澄の生き方に同調も同情もしない。」

”　こんなあたしはこんな風にしか生きれない”　なんて思い込んでいる人に、開くべき扉は現れない。」

ウーロン茶のグラスの中で氷が音を立てる。

周囲の喧騒が耳に戻って来た。

気付くとテーブルの上には適当につまめる料理が幾つか並んでいた。

「康祐くんが傍に居て必要とされて・・・理由がどうであれ・・・

・あたしの存在を

見つけられそうだった・・・。」

ユウがジョッキを又空けていて追加オーダーする。

チロルも巨峰サワーを空にして「同じものを」と店員に告げる。

「小さい頃からずっと、除け者にされるのが怖くて、人に同調して自分の意見なんて無くて

自分を外に出さなくて、平平凡凡で……。善にも悪にもならないあたしにとって彼は

眩しい位の男性ひとだった。……彼を信じていたかった。」

あたしはグラスを握りしめていた両手をおしぼりで丁寧に拭いた。体温が伝ったのかグラスは酷い汗を掻いている。

「ねぇ香澄。誰かと一緒にとか、誰かがそう言ってくれるからとか・
・それって他力本願って

言うか、他人に寄生パラサイトしてない？」

痛烈に強烈に耳が痛い。

親が喜ぶから良い成績を取ろうとして

会社と言う組織にぶら下がってサラリーの為に働いて

結婚をすれば幸せになれると思込んで

ヒロトなら聞いてくれると、ヒロトならあたしを想ってくれると。

あたしは？

あたしは、ただ寄生している。

アタシノ意志ハ何処ニアツタカナ。

あたしが知識を深めたいと思ったか

あたしが会社の利益に繋がる様な働きを自らしたか

あたしが結婚に何を求めたか

あたしが、ヒロトに想われるべき女か。

眼窩、鼻腔の奥がツンとする。堪えたかった。泣きたくなかった。涙を一粒でも零したら、認めた事になる。

自分には何も無いんだって。

与えられた「生」を全う出来ない愚かな人間だって。

誰が為人生。

己を知らずして、他を求めるべからず。

己を知れ！

目の前に差し出された何かに思わず手を伸ばした。

柔らかい肌触りに”ハンカチ”だと気付き、自分が涙を流したのだと気付かされる。

一つだけ答えが出ているのだとしたら、あたしの人生に”康祐クンは不要”だという事か。

「・・・チロル・・・ありがとう。」

久し振りの感触にあたしの涙は止め処も無く溢れた。

口約通りずっと無言を貫いていたユウが、駅へと向かう帰り道言葉
を紡ぎ始めた。

「人に騙されたり、世間に文句ばっか言う奴は弱い奴だと思ってた。
そういう人間だって

居るのは判ってる。だけど俺の周りにそんな弱い奴は先ず居ない。
」

向こうから歩いてくる若者達を避けてチロルの後ろへと移動する。
ユウが立ち止まり振り返る。チロルもそれに倣ってあたしを見下ろ
す。

「ヒロトが言っただろ、見えてる事だけが真実じゃないって。ずつ
と考えてた。

・・・お前だって、このままで良いって思ってる訳じゃないって
事だよな？」

あたしは真っ直ぐにユウを見上げた。

「あたしやユウやヒロトは幸運だったと思う。演者になるって夢が
見つかった。夢中になれる物が

見つかって、努力する。努力するから自分を信じられる。」

「俺、弱いところから這い上がって来た奴、知ってるよ。一生懸命
生きようとしてる奴知ってるよ。」

ユウがジーンズのお尻にあるポケットから財布を取り出して札入れ
の部分から長方形の紙を取り出した。

「チケット。」

あたしは差し出されたそれを手に取り、街灯の光を頼りに文字を読
み解く。

ヒロト主宰の劇団の公演チケットだった。

あたしは顔を上げる。

「弱点がない奴なんて居ないけど、それを強力にカバー出来る何かを持ってる奴は心底強いよ。」

あたしが敬愛するヒロトにも弱い部分があったの・・・？
だからかな。

あたしが弱ってるのを直ぐに感知してくれた。

「カスミ、俺今日お前に会えて良かったよ。」
顔を上げると、チロルもユウも優しく微笑んでいた。

あたしも。

あたしは小さく頷いた。

会わなければ伝わらなかった表情、声色。

話さなければ解って貰えなかった感情、不安。

目の前に、「友達」が居る。

家の最寄りの駅で下りて、自分の町なのだと再確認する。

改札を抜けてあたしはバッグから携帯を取り出す。

登録番号が真新しいヒロトの名前を呼びだして、数回コールする。

『カスミ?』

「うん・・・チロルとユウと会ったよ?」

『うん。』

「ユウに同席する様に言ったの、ヒロトでしょ?」

『・・・うん、話せた?』

やっぱりなっと思う。ヒロトはユウも大切な友達で、あたしにも”

ユウ”を理解して欲しかったんだと思う。

「ちゃんと話したよ。話せて良かったと思う。」

『それで少しは見つけ出せそうなの?』

「足掻いてみようと思う。」

電話の向こうでヒロトの息が漏れる音が聞こえた。

『良い事だ。』

あたし、意外と簡単だな。

自嘲的に笑みを零す。

家までの帰路にある川沿いの遊歩道。あたしはのんびりと歩いていた。

ヒロト達に、ああしろ、こうしろと言われた訳ではない。

「理解」をして貰っただけだ。

こういう弱い人間も居るんだって事、騙されてるって解ってても縊るしかなかったあたしを。

ただそれだけなんだけど・・・強い何かを得た気がした。

背中を押されたとしても言うべきか。

”大丈夫だよ”

と言われた気がする。

何かを始めるのに早いも遅いも無いんだよねって、あたしも未だやれる事があるんじゃないかって思える。

信頼は、心強い後ろ盾。

お母さんもきつと、あたしが選んだ人なら間違いないだろうとあたしへ全幅の信頼を置いてる筈だ。

あたしは未だ何も失っていない筈。

未だやれる筈。

己を奮い立たせる。

遊歩道を飾る桜並木。

見上げると、小さな蕾を一つ見つけた。

この桜が咲く頃に、あたしは笑っていたと思う。

久し振りに康祐クンと会うと言うのに、滑稽な程、地味な格好でアイラインさえも引かないあたしが居る。

驚く程、『康祐クン』に対して気が抜けたあたし。

更に言えば、あたしは今日「フランスに行けない」と”簡単”に口に出れてしまえそうだ。

「何か今日は随分ラフな格好だな、香澄。」

彼のマンションのキッチンカウンターで、コーヒーメーカーに水を注ぐあたしをソファの上で目視する康祐クン。

「おかしい？家ではこんな感じだけど。」

「・・・いや・・・うん良いと思うけど・・・。あ、あれアパート探した？」

水が注がれた途端にコーヒーの匂いがキッチンに立ち込める。

「うん、いくつか見たんだけど、やっぱり予算が合わないかなって。この前のアパートメントより

随分と上がっちゃみたい。」

「随分って？香澄はどれ位出せる？」

コーヒーに入れるミルクポーションを要し冷蔵庫を覗く。

誰かの為の発砲水が目に残る。

最上段にはワインが横たわる。思わずあたしはそれを手にした。

安いワインではないのがエチケットを見て直ぐに判った。そしてこれが、あたしでは無い誰かの為への演出品である事も大概理解出来る。

「このワイン、康祐クンが飲みたいって言ってたワイン？」

「え？・・・あ、うん、そう。俺もう直ぐ向こう行くから餞別だって友達から貰ったんだ。」

下手な嘘。

「あたしも飲みたいな。」

「え？・・・香澄、赤苦手だったじゃん、どうした？今日？」

あからさまの動揺っぷりに思わず失笑しちゃうよ。貴方こんなに解り易い人だったかしら。

「これくれた友達^{ひと}って、どんな女性？」

あたしは言った。

紛れもない、的を得た質問を。

デカンタの中に黒い液体がミルクラウンを造り出す。
あたしはコーヒークップを1個だけ天板の上に置いた。

「康祐クン？」

あたしはコーヒーをカップに注ぐとそれを何時ものように彼の待つリビングのガラステーブルの上にコトリと置いた。

でもあたしは何時ものように其処には腰を下ろさない。

ソファに座る彼を見下ろしていた。

「女じゃないよ？何言ってるの。大学ん時の潮田って奴だよ。前に話した事無かった？」

「そう。」

「あれ？香澄は、コーヒー飲まないの？」

冷静を保ちたい康祐クンはカップに手を伸ばす。

「康祐クン、あたし達今日で終わりにしない？」

極力何でもない世間話の様にあたしは言葉を口にした。

だからなのか彼も直ぐに返事を返さなかった。頭の中で言葉を整理したらしい。

「終わり？」

「あたしは貴方とフランスには行かない。もう二度と貴方とは会わない。」

「どういう事だよっ！！」

理解が終わったのか、彼はいきり立った。

「少なくとも貴方はあたしを二度は裏切ってる。」

会社の後輩、庄野。そしてこの部屋に何度となく立ち居る康祐クンと同じ香水をつける誰か。

彼女が本命なのだろう。

彼女の為の、発砲水に彼女と飲む為の赤ワイン。

「半月前位かな、カフェで貴方と小嶋クンが話す傍にあたしも居た

んだよ？」

「え？小嶋・・・？」

記憶を探り出そうとする彼を尻目にあたしは、リビングテーブルの椅子に掛けておいたコートを手に取る。

小さなバッグの中を探って、自分では一度も使わなかったこの部屋のスペアキーを取り出す。

それをテーブルに静かに置いてあたしは息を吐いた。

繋がりを断つ為の行為を行使出来た事であたしは安堵する。

記憶の糸を手繰り寄せたのか彼の顔は色を失くし始める。

「さようなら。」

ショートブーツに足を入れて金属製のドアを押し開ける。

背中でボタンと音がして、終わったのだと思う。

自らの意思で、自らの足で未来を歩き始めたのだと思う。

あたしは手の中で震える携帯を見つめていた。

不思議だな。

別れ話が終わって反論も追従される事も無かったのに、何故何度な
くこの携帯は震えるのだろうか。

康祐クンのマンションを出てから既に半日が経過する真夜中。

あたしの携帯はそろそろ力を失くしそうだった。

着信を拒否する。

メールも受信拒否の設定を行う。

簡単に彼からの連絡は途絶えた。

彼から届いた最後のメールには「もう一度会って話したい」とあ
った。

フランス行きまで一カ月を切った。

彼は、”通訳”を失くし慌てているのだろうか。

あたしはパソコンを立ち上げてメールをチェックする。

ヒロトがチャットにおいでとメッセージを残していてくれた。

あたしは足取りも軽く、お気に入りの中からチャットをセレクトし
て入室する。

カスミ…こんばんわ >a11

ヒロト…おー来たな

チロル…カスミ、明後日スクールで会おうね、あたしはもう落ちな

んだわ

カスミ…了解＞チロル

オザ…仲直りしたんだって？

ユウ…話せば解るもんだぜ！

アツシ…お前がだろ、ユウ

ヒロト…笑

カスミ…笑

アンジー…カスミとチロルとユウ会ったんでしょ？あたしも会いたかったなあ、オフ会はあ？！＞a11

ユウ…カスミは人見知りだから俺とチロルで限界ダ！！

アツシ…お前は誰だ

ヒロト…お前が言うな

オザ…お前が限界ダダダダダダ

くだけた口語で面白い文面、あたしはケタケタと笑った。

一頻り笑って、あたしはふと我に返る。

あたし笑えてる。

康祐クンと別れたばかりだと言うのに・・・？

康祐クンは『もう一度会いたい』と言っているのに・・・？

パソコンの傍らに置いた携帯を見つめる。

拒否した筈なのに、そうしたのは自分なのに、胸の奥の方がチクリとするのは何故なの。

<41>

もう渡仏の予定は無いのに火曜日はランゲージスクールへと足を運ぶ。

相変わらずのマンツーマン授業であたしの仏語は大学時代のレベルに戻っていた。

レッスンは終われば、近くのカフェで一人ランチ。

オーダーしたプレートが届く迄の間、手帳に挟んでおいたヒロトの公演チケットを眺める。

そこに行けば会える。

ヒロトの実体を知って、きつとヒロトの声に納得する。

そんな自分を容易に想像出来る。

けれど、”ルール”がある。

たった一つのこの恋のルール。それは『会わない』。

あたしは思い返して口元を緩める。

「恋をしてくれませんか」なんて、良く言えたものだ。

実際は胸が苦しくなる様な焦がれる様な恋でもないし、男女間の厚い友情を物語る様な仲でも無い。

けれど、其処には信頼がある。

文字と、文字間と、声色で知った”信頼”。

ランチプレートが運ばれてきてあたしは顔を上げる。

店内に大きな声が響いてきた。しかもそれはこの国の共通語では無い。

赤茶色の髪を携えた背の高い女性が店員に向かって何やら訴えている。

る。

残念ながら周囲はそれを傍観する事に徹していた。
勿論あたしも例外では無い筈だった。

—彼女の希望が耳に届くまでは—

ランチタイムの混雑時、彼女と店員のやり取りに沢山の人の目が注がれた。

そんな中あたしは椅子から腰を上げる。

「Qu'est-ce que tu fais? (どうしましたか?)」

今、吸収してきたばかりのネイティブな発音さながらにあたしはフランス語を吐き出した。

すると彼女は笑みを漏らし、あたしに捲くし立てる様に事情を話す。

「彼女は、手持ちの日本円が少なくて支払いが出来ないからカードでも大丈夫か聞いています。」

とあたしは完全に委縮している男性店員にそう伝える。

男性店員もあたしを介した事で安堵の色を見せて「オーケー」と彼女に向かって答えた。

その場に仏語の解る人が居なかっただけの事で、渡仏しようと考えていた者としてはそれ程大した事では無かったのだが、店員さんには握手まで求められ、彼女もあたしにハグをしていき、店内の人達の視線もそれは熱を帯びていた。

気恥ずかしさにあたしは椅子の上で小さくなって、ペンネにフォークを刺した。

しかし心は晴れやかだった。

それは善の行いを気負いなくやれたからだろう。

ふとお母さんの言葉を思い出す。

『人の役に立ちたい』と目を輝かせていた頃のあたし。

今のあたし、役に立ってたよね。微力に対して”アリガトウ”を貰えた。

嬉しい！

この照れ臭い沸き上がる感情がこそばゆい。

・・・あたしに出来る『人の役に立つ』は、今はこれなんだ・・・。

すっと胸に落ちてきた解答。

そして、もう一つの回答をしなければ、きっとあたしは進んではないけないんだ。

拒否をしても削除は出来なかった番号とアドレス。

康祐クンの名を呼び出し表示させ、メールを作成する。

直ぐに電話が震えた。

早いレスポンスに内心焦りながら、通話ボタンを押した。

「もしもし・・・。」

『香澄?!あの・・・メール見た。今夜でも良いんだけど、今は何処?』

「恵比寿のカフェに・・・。」

『今渋谷に居るから、其処行く。待ってて。』

通話を終えてもあたしは放心状態の中に居た。

あの康祐クンが営業の最中だと云うのに、あたしと話をする為に仕事を放って来るだなんて・・・。

数日前迄なら想像する事さえ無かった事だ。

携帯を閉じる。あたしは考える。康祐クンが何を言おうとするかを。

「一緒にフランスに行って欲しい」

先ず間違いなくこれは言うだろう。それが目的だったのだから。それから、庄野や本命の女性の事について触れてくるだろうか。

<43>

彼はプライドが高い。

利用しようと思っていた女に別れを言い出された挙句、元凶について問い質される事は二度と経験したく無い筈だ。

あたしを罵倒するだろうか。

考えて苦笑いする。ちよつと有り得そうな話だ。

店員がプレートを下げる。

あたしは冷房によって冷えた体に、温かい飲み物を注文した。

30分近く経って、彼は現れた。

康祐クンに会うのは数日振りだと言うのに、彼は以前の様な快活さを失っていた。

目の下の隈が気になった。引き継ぎで多忙なのだろう。

「久しぶりな気がする・・・そうじゃないのにな。」

康祐クンはジャケットのボタンを外し、裾を気にしながら椅子に座った。

目が合うと彼の方が意識して視線を外す。

落ち着かないのか煙草を取り出そうとしてテーブルの上を見渡す。

灰皿が無い事で禁煙なんだと認識して、冷水に口を付ける。

彼の為に運ばれてきたコーヒーを見て、あたしはミルクポーションを一個ソーサーの上に置いた。

「あ・・・ありがとう。」

あたしは彼の変化に戸惑う。

それはこの一年近くずっとしてきた当たり前の行為だったのに、ミ

ルク一つの気遣いにお礼を言われたのは初めての事だった。

「こんな事してくれるのは、香澄だけだよ。」

康祐クンはミルクをコーヒーに溶かす。あたしは既に冷めてしまったミルクティーのカップに手を伸ばした。

ぎこちない時間が苦しかった。

会って話そうとメールをしたのは自分なのに、いざ見た事の無い様な康祐クンを目の前にして、あたしの中で警鐘が打ち鳴らされている。

康祐クンの衣擦れの音が聞こえてくる度にあたしは身構える。

けれど、彼の中に迷いがあるのか、ただ慎重に言葉を選んでいるのか言葉を発しようとしらない。

沈黙は流れ、やがて康祐クンが口を開いた。

「フランスに行かなくても良い。だけど、俺達やり直さないか？」

家に近づくにつれて耳障りな音が大きくなる。

隣の家に防塵カバーが被され、トラックの荷台には瓦礫が積まれていた。

「ああおかえり香澄。お隣さん解体工事で今日から明後日迄この調子らしいのよ!」

下駄箱の掃除をしながらお母さんが顔を顰め、大声であたしに話しかけた。

「伊勢崎さん・・・どうしたの?」

「息子夫婦に土地売ったらしいわ!」

やはりお母さんは大声で、あたしは大きく頷き返した。

2階の自室に入ると騒音と共に振動も強く感じた。

隣接する窓からカーテン越しにも白っぽい景色が見えた。

今迄、うちと同じ2階建て木造家屋があたしの部屋への採光を遮っていた。カバーが風に煽られる音がする。

取っ払ってしまったら、眩しい光があるのね。

暫く窓の光を見ていた。

更地になって、カバーが外されて、巨大な空間が眼前にある様を思い浮かべてみた。

『まっさら』

そんな言葉がお似合いかしら。

あたしは我に返ってバッグの中から、テキストや財布、手帳を取り出した。

手帳の中の紙きれに触れる。長方形のそれ。

彼があたしの為に用意した成田発の航空チケット。

「これは渡しておく。捨ててくれても構わない。でも、さっきの事はよく考えて欲しい。」

康祐クンの眼差しは真剣そのもので、こんな一面を持ち合わせていたのかと記憶の彼を探った程だった。

彼が『あたしを』必要としているのが解って、あたしは、ただ。ただ戸惑っていた。

『通訳』を欲しがっていた彼が、あたしにフランスに行かなくても良いとさえ言った。

あれ程、自分主導であたしを操っていた彼があたしに対峙して懇願した。

あたしは彼の問いに即答出来るほどの能力は無く、黙秘を貫いて動揺を包み隠してあのカフェを出た。一度だけ彼を振り返ると、彼は言った。

「待ってる。」と。

康祐クンが、日本を離れて2年も海外に行くと言うのに何故その彼があたしにその言葉を放つか。

<44> (後書き)

すみません昨夜UPしようと思ったのに今朝になってしまいました。

＊＊

＊ ＊ ＊ 壬生 ＊

<45>

ユウ…今回は良かったよ>ヒロト

チロル…うわー何処目線

アツシ…だなっ

ヒロト…

チャットでは、ヒロトの劇団の公演の話をしていた。ユウは、ヒロトにあたしにチケットを譲った話を話しただろうか。

アンジー…あたしはどうだった？

オザ…完璧

アンジー…オザに言われても泣 他人に言われない

ユウ…え？何その発言。他人じゃないって事？

ヒロト…ユウにしては鋭いじゃん。

ユウ…は？ナンダ

オザ…6月に結婚するから♪

アンジー…から♪

チロル…おめでとー

ユウ…あ、何だお前も知ってたの？

わぁ…

ロムリながらあたしは口元を綻ばせる。結婚か…。オザとアンジーが…。

皆に会ったばかりの頃、目途がついたら結婚したいってオザ言ってたもんな。目途か…。

どんな展望があるのかな、彼らには。

アンジー…ねえカスミ、最近来てる？

一居るよ。

チロル…此処には最近来てないよね？>all

ユウ…ヒロトは？会ってないの？カスミに。

ヒロト…うん。チロルの方が会ってんでしょ。

ユウ…だわな。で何でカスミ？>アンジー

アンジー…結婚式とかやらないけど内内でパーティしたいからカスミも、それなら来れるかなって？

チロル…あーそっかー。オフ会は無理っぽかったもんね。木曜に会うから聞いてみるよ？

オザ…しっかし不思議じゃね？俺らカスミに会った事ねーんだぜ？

ユウ…俺は会ったよ

アツシ…茶々すんな

チロル…ヒロト、会いたいでしょ 笑

ヒロト…その笑はなんだよ。

パソの画面の前であたしはヒロトが何と答えるのか息を飲んで待った。

何度リロードしてもヒロトの答えは映し出されない。痺れを切らしたアツシの発言で、回答を得られない事を悟る。

アツシ…はい、スルー…

オザ…スルー

アンジー…スルー

ユウ…する…

あたしは大きく息を吐いた。

あたしはどんな回答なら、納得出来たんだろう。
何に、納得しようとしてるんだろう。

<46>

ヒロトに『アタシ』を見て欲しいと、あたしを理解して欲しいと願
い無茶同然で「恋をして欲しい」とメッセを送った。

ヒロトはあたしに応え、あたしを想っていてくれている。

これがあたしの求めていた理解者、だった筈。

康祐クンとの決別のきっかけをくれた信頼すべき”リアル”な友人
チロル達にも感謝だ。

なのに、あたしは手を拱いている。

康祐クンに『アタシ』を必要とされた事で、あたし的手中に叶った
想いが溢れている。溢れすぎている。

今までにこんな経験が皆無で、戸惑うばかりだ。

切り捨てた筈の、終わった筈の恋の相手があたしを愛おしい目で見
つめていた。あたしの心は騒いだ。

まただ。

あたしは又、自分で決め兼ねて誰かに縋ろうとする。誰かに答えを
導いて欲しいと苦悶する。

「・・・駄目だよ。」

ぼそりと口から言葉が零れる。

自分で考えて考えて、悩んで悩んで、今一番最良の答えを導き出さ
なきゃあたしはきつと終わってしまう。

チロルの言葉がふいに思い返された。

『香澄がその男と歩いていくんだって強い意志がなかったら成り立たないよ?!』

あたしは、ベッドの上に足を崩して座り直ぐ其処にある壁に背中を付けた。

ヒロトの公演のチケットに視線を落として、ヒロトを想う。

そして一つの欲望がむくむくと湧き上がった。

—ヒロトに会いたい—

その翌日あたしはそれを実行に移した。一輪の花を手に。

大きな劇場でミュージカルを観劇した事は過去にあったが、こういった小さな舞台を見るのは初めてだった。

スタッフジャンパーに身を包んだ女性にチケットを見せ、空いている席をセレクトする。

公演も4日目だからお客も疎らで、あたしは前から3列目、舞台から見て右端に腰を落ち着かせた。

今日此処に来る事をチロルには話して居ない。勿論、ヒロトにも。

”会わない”と云うルールをあたしから破ってしまった。

<47> (前書き)

この一話、舞台のストーリーなので長文になっております。

<47>

舞台は、戦時中―

日本は米国に対し、強攻していたがとうとう一史かずふみにも召集が掛かった。

一史は出発の前夜、婚約者である順子に別れを告げる。

「・・・貴方はお国の為に行くんですね。」

「順子、君を守りたいから僕は行くんだ。」

「貴方は！・・・私を守ると言いながら行ってしまおうんですね？」

順子は一史に背を向け、両手で顔を覆う事もせず、肩を震わせ咽び泣く。

一史はその順子の肩に手を掛けて言う。

「我が国日本は勝たねばならぬ。勝たねば明日は無い・・・
順子、必ず僕は生きる。」

そして君の前に生きて戻ってこよう。」

一史は戦地へと向かう。

その後米国のB29に因つての爆撃を受ける。日本国民はラジオからの天皇陛下の

肉声で敗戦を知る。日本は多くの死者と瓦礫を積み上げた無残な姿を晒していた。

字の読み書きの出来ない順子は、病弱で戦地に赴く事の出来なかった幼馴染・三郎に頼み

一史宛の手紙を書き続けていた。

けれど何時になってもそれに対する返信は順子の元には届かなかった。

「約束したのにつー……。」

そして2年の時が過ぎ、一史は日本の地に戻って来た。

「少尉！ 順子さんと云う女性に会いに行かれるんですね。」

一史の部下である男がそう言った。

「勿論だ、すまないが手を貸してくれるか。」

一史は戦禍で片足を失くし、歩行に困難を来していた。

一史が部下と連れ立って、順子が居る筈であろう場所へ歩を進める。

ところが。

順子の傍に、三郎がおり、更にその三郎に赤子が抱かれていた。

幸せそうに微笑む順子を見て、一史はその場を後にする。

杖を持たない右手の指で眉間をぎゅっと抑え込み、こみ上げる涙を押し殺す一史。

一史は順子の幸せの為に自分が居てはいけない存在なのだと思う。そして

部下に一通の手紙を託す。部下は、託された手紙を握り締め、順子に届けに行く。

「山田順子さんでしうか……。私は宗田直彦と申します、手

紙をお届けにありがとうございました。」

「・・・手紙・・・？あの私は字が読めません、申し訳ありませんが読んで頂けますか。」

部下の宗田が手紙を読む。

「北条一史少尉、12月4日に収容されていた病院で・・・死亡致しました。」

病床、少尉から先に逝く旨を貴方様にお伝えする様仰せつかっておりました。以上です。」

順子は地面に額を押しつける様に大声を張り上げて泣いた。

部下が一史に問う。

「少尉・・・本当にこれで良かったのでしょうか。」

一史はほんの少し笑んでそれに答える。

「これで良いのだ。僕は順子を愛している。

彼女の最後の人になれなかったのは、残念だけれど。」

一閉幕

<47> (後書き)

珍しくこの時間にUPしましたあ。

壬生

舞台上で、演者達が手を繋ぎカーテンコールで応えている。それを耳で感じ取る。両目から涙が溢れ出て前が良く見えない。

演者がカーテンの奥に消え、アナウンスが聞こえてきた。

『今日は劇団アクトの公演＜ラブレター＞をご覧頂き誠に有難うございました。』

お帰りの際はお忘れ物の無い様、お気をつけ下さいませ。又、いつかお会い出来る日を

団員一同お待ちしております。』

その声を皮切りに続々とお客が席を立つ。

あたしは入場の際貰った劇団のチラシを小さく折り畳んでバッグにしまう。

それから流れに乗って、会場の出口へと向かった。

出口に立つスタッフの一人にあたしは一輪の花を差し出す。

「これを主宰の方に。」

あたしは名を告げる事も無く、その小さな箱を飛び出し夜の街の空気を胸一杯に吸い込んだ。

ヒロト……。

想像していた通りのヒロトだった。

役柄で軍服に身を包んでいたヒロト。”少尉”である強さはきつとヒロトの根底から滲み出る強さなのだと思う。

未だあの世界に酔っていたあたしの携帯が震えた。

それはその世界の人からのコンタクトで……あたしは躊躇いの後、

通話ボタンを押した。

「も・・・もし・・・。」

『ルール違反じゃないの？カスミ。』

決して怒りを表すトーンの声じゃない。

「ごめんね・・・約束破って・・・。」

『・・・其処に居たんなら、会いたかった。』

胸がぎゅってなった。

この人は本当はあたしの本物の恋の相手では無いのに、その一言が胸を締め付ける。

あたしが黙ってしまった事でヒロトは空気を変えるかの様に話題を変えた。

『俺ね、目の前にカスミって名乗る女の人が10人居たとして、本物のカスミを

指差す事出来ると思うよ、自信ある。』

「ふふ、凄いな・・・ヒロト。」

・・・もしかしたら、ヒロト、あたしがチケットを貰った事知ってたのかな。

ユウやチロルからあたしの風貌を聞いてあたしを頭に描いているのかな。

あたしが、今日あの席に座っていたのが見えてたのかな。

<48> (後書き)

そして又UP・・・。

壬生

『これって何の花?』

「アイリス・・・。」

『ありがとね、今日観に来てくれて。』

「ううん、こちらこそ。凄く良かった。・・・本当に素晴らしい舞台だったよ、ヒロト。」

『カスミ・・・何かあった?』

鋭すぎてこっちが困る位だわ。

「ううん無いよ?」

『そっか。・・・皆会いたがってた、チャットおいでよ。』

「うん。じゃ・・・又。」

『又。』

ヒロト?

ありがとう。

それしか貴方に伝えるべき言葉が見つからない。

多くの人間が混在するコミュニケーションツールから貴方と云う人に出逢えたカスミは幸せだよ。

アイリス・・・花言葉は、あなたを愛す・優しい心・あなたを大切にします・私は賭けてみる・恋のメッセージ・・・

あたしは顔を上げた。

そこには決して強くはないけど、弱い従順なだけのあたしは居ない。

家に帰り着き、あたしは机の上で便箋を広げ一通の手紙をしたためる。今日のヒロトの公演のチケットの半券も同封し封をする。それから引き出しの奥に仕舞い込んだ。

次にパソコンを立ち上げて、インターネットの履歴とお気に入り削除する。

あたしにはもう不要だ。

ヒロトとの当初の約束は、60日と言う期間限定の恋だった。

その期間に残り10日を切っていた。あたしは一つのルールを破って今日ヒロトに会いに行った。

それで、もう良いだろう。

ヒロトとの恋の舞台から、あたしは降りよう。

窓に目を注ぐと吸い寄せられる様にあたしは鍵を外し、窓を開けた。既にカバーは無く、枠組みさえも取っ払われていた。予定より早く解体工事が終わったのか。

3月の冷たい空気が肌を刺す。

澄んだ夜の空に黄色い月がぽっかりと浮かんでいる。

それは、とても綺麗な月で、ヒロトと見たかった月ときっと同じだろうとあたしは思う。

「ヒロト、綺麗な月だよ?」

きっと今頃、ヒロトも空を見上げてる。そんな気がしてならなかった。

窓を閉めてベッドに座り込んだ。脇に置いてある大きなキャリーケースが目に入る。

— 2年後 —

「カスミ、コレドウイウ意味？」

生徒の一人が携帯の画面を広げてあたしに問いかける。
どうやら友達からのメールの日本語の解釈に戸惑っているようだった。

「それはね・・・。」

とあたしは授業しながら、彼に日本語のニュアンスをフランス語で伝える。

「Merci! カスミ。」

そう言い彼は笑顔でクラスルームへと入室して行った。

あたしはその背中を微笑ましい気持ちで見送った。

人前に出るのが嫌で嫌で仕方なかったあたしが、縁あってランゲージスクールの日本語クラスを受け持つスタッフとして常勤している。

「香澄、ランチ行く？」

フロントからチロルが手を上げる。

「お蕎麦にしない？」

あたしが言うのとチロルが同調する。

ビルを出て近くの行きつけの蕎麦屋に入る。大将が知った顔に笑顔を見せる。

「えーっと鴨南と、香澄はざるだよね？」

「うん。」

チロルが女将さんに着席と同時に注文をする。

お水を一口含んで、チロルは財布の中から何かを取り出し、あたし

に差し出す。

「はい、ヒロトとこの今週末からのチケット。」

「あ有難う！」

あたしがそれを受け取ると、チロルは何時もの台詞を言う。

「本当に良いの？会わなくて・・・。」

だからあたしも何時もの返答をする。

「うん良いの。」

2年前、ヒロトに会ったあの日を境にあたしはヒロトとの連絡手段を断ち切った。

チロルだけには、本当のこと、実際に在った事を包み隠さず話した。その上で、ヒロトに何か聞かれてもあたしとのコンタクトは皆無だと答えて欲しいと懇願した。

「・・・あ、今日さ香澄、誕生日だよね。夜飲みに行かない？スタッフの皆とさ、ぱあーっと！ね？」

「うん嬉しい！」

あたしは配膳されたお蕎麦を箸で掬い上げた。

「香澄・・・来てくれたんだ。」

様々な国の人達が行き交い、大きなキャリーケースがそこら中に有って、アナウンスがひっきりなしに飛行機の離発着を告げている。

あたしは康祐クンに手渡されたチケットを、彼に差し出した。

「・・・。」

あたしの手の中の質量が微妙に変わって、あたしは深々と頭を下げた。

「香澄。」

「康祐クンとフランスには行けません。」

暫しの沈黙の後、康祐クンが小さく笑う。

「破り捨ててくれて良かったんだよ？」

「・・・康祐クン、あたし・・・自分がやりたい事が見つかったの。」

「・・・。」

遠くでエールフランス便についてのアナウンスが告げられていて、あたしはそちらに目をやる。

彼も一瞬そちらを見たが、直ぐにあたしに視線を戻した。

「香澄、変わったな。」

彼は笑顔だった。

「・・・あたしに勇気をくれた人達が居たの。」

「そうか」と頷いた。彼がビジネスバッグを持ち上げた。

「・・・俺がお前を利用しようとしたのは事実だよ。だけど、心が安らいでたのも本当。」

信じて貰えないかもしれないけど。」

あたしは右手を彼の前に差し出した。

「J e p r i e p o u r s u c c e s s (成功を願うわ)」
康祐クンのぬくもりを掌いっばい感じて、あたしは確信する。

康祐クンの事、心から応援するって。

父も母も妹もあたしの行動に驚いていた様だったが、自分の夢を伝えるとお母さんが玄米茶と塩大福を
スーパリーのビニール袋から取り出した。

あたしは『人の役に立ちたい』と、日本に住む外国人を言語の部分で支援すると言うNPO法人の門を叩いた。

仕事は、ガイドとして日本を案内する事や働き口を探す事、時には病院で痛みを代弁する事もあった。

そんな事をして1年はあつと言う間に過ぎて、チロルの勤めるランゲージスクールで日本語クラスの講師に空きが出て、今に至る。

その間あたしはチロルに頼んで、ヒロトの劇団の公演は欠かさず足を運んだ。

あたしは歓楽街の一角の何時もの居酒屋「みぞれ」に向かった。
引き戸を開く。

「奥、どうぞー！」

とスタッフに促される。

仕切りの為の紺の布を手で押さえ、中を覗く。

そこには居る筈のチロルやスクールのスタッフは居ない。

有り得ない先客が其処でビールに口をつけていた。

その先客はそのままビールのグラスを空けた。

あたしは布を押さえた手もそのまま、僅かに開けた口も閉じられない程に混乱をきたし、脳がこの状況を理解しようとバンバン、アドレナリンを放出していた。

「期間は60日、ルールは会わない。全部カスミが決めたのに悉く破ってくれたよね。」

ああちよつと待って・・・。

今、心の準備は出来てない。

今日、ヒロトに会う準備は何にも出来てない。

今この50センチ程の距離で貴方の声を聞いて平然とはしてられない。
い。

直ぐ回れ右をしてこの場を立ち去りたい。

ヒロトがテーブルに片手をついて立ち上がる。

駄目、来ないで、息出来なくなっちゃう。

あたしは思わず両目をぎゅっと瞑って、体を硬くした。

耳の傍で布が動く音がして、あたしの左手から落ちていったらしい。ヒロトの両腕があたしの腰を包む様に回されて、指を組んだみたいであたしはがっかりとその輪の中に閉じ込められる。

ヒロトの額が、下を俯くあたしの頂頭部にゆっくりと置かれた。

あたしは掲げていた左手をそろそろと体の脇に下ろす。

「チロルも女優になったよなあ？この俺を2年も騙し通すなんて。」
「。。。。」

想った人の体温が直ぐ其処にある。愛おしいと想う声が直ぐ傍にある。

駄目、今口を開いたら2年の想いが止め処も無く溢れてしまう。みっともない位、ヒロトを欲してしまう。

「香澄、俺は未だ『最後の人』になれる？」

あたしが2年間積み上げ続けた防波堤は、ヒロトの優しい手や声や体温に浸食されて、決壊した。

「ヒロトが良い！」

舞台でも何でもない、ごっこでも演技でもない。

あたしは求めるべき相手に素直に感情を吐き出した。

＜53＞ラブレター 最終話

香澄へ

今、貴女がこの手紙を読んでもと言う事は

貴女が強い意志を持って、自分の道を歩いていると言う事ですね。

貴女と一緒に居たいと思った人と、笑顔でこの手紙を読んでもいますか？

それとも、たった一人で懐かしい思いでこの手紙を読んでいるんですか？

どちらにしても、貴女は自分を知ったのですね。

ただ流されるのではなく、自分の足で、努力をして未来を歩こうとしている筈ですね？

これから又迷う事もあるでしょう。

そしたら躊躇わず立ち止まって、自分の胸に手を当てて答えを探しましょう。

決して急がなくて良いの。

香澄

野々原

未来のあたしに宛てた手紙は

ヒロトの出演した映画のパンフレットや半券と共にあたしの宝箱で眠っている。

*** Fin ***

＜53＞ラブレター 最終話（後書き）

最後迄お読み頂き有難うございました。

又、お気に入り登録、評価頂きまして有難うございます。
本当に励みになります。

今回のこんな作風いかがでしたでしょうか・・・。

カスミとヒロトのこの先は？と、もし気になった方がいらっしゃいましたら

ご一報下さいませ（笑）

恐らくいらっしゃらないと思いますので、（哀・笑）ご想像にお任せと言う事でっ。

暫く期間空けてまして、連載物書きたいなあと構想中です。
その際は又お付き合い頂ければ幸いです。

*** 壬生 ***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4412k/>

ラブレター

2010年10月9日04時16分発行